
椿の契約

柚木夏莉(花散里)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

椿の契約

【Nコード】

N7820Y

【作者名】

柚木夏莉（花散里）

【あらすじ】

人間のリクオは妖怪の許婚と呼ばれていた。許婚と呼ばれる人間は、十三歳になると、妖怪の生贄にされるという。

夜昼の時代劇コメディです。オールキャラ出演。

他サイトで連載していたものを投稿しました。

妖怪（前書き）

BL要素を含みますので、ご注意ください。

妖怪

妖怪の許婚者と呼ばれる人間がいる。

山あいの小さな村に伝わる風習だが、何故かこの村には時折生まれた赤子に妖怪から名前が贈られ、名を贈った妖怪の許婚者と呼ばれる風習があった。

秋の空に美しく光る銀のすすきの穂波を見つめるリクオもその一人だった。生まれてすぐの頃に妖怪から名を贈られ、以来そう呼ばれてきた。

とうに親はなく、記憶の中にすら家族の姿がないリクオを村のみんなが育ててくれたのは、自分が妖怪の許婚者だからだと知っていた。許婚者　　といえは聞こえはいいが、要は体のいい生贄なのだろう。どういう基準で選ばれるのかは知らないが、どちらにせよ自分から逃れることはできなかった。名を贈られた時はまだ這うこともできない赤子だったし、親を亡くした時もまだやつと立って走れるようになったばかりの頃だったのだ。生きていく為に、その名前を受け入れるしかなかった。

どんな妖怪なのだろう？

とリクオは銀のすすきを一本手にとった。

明日でリクオは十三歳になる。十三歳は妖怪の成人年齢　その日に妖怪達がやってきて自分を名付けた相手のところに連れて行くという。

「頭からがりがりかじられるのは嫌だな。でも生きながら内臓を引き出して食べているのを見せられるのも……」

指や足を一本ずつ折って食べていく変態だったらどうしよう。いや生き血を全部啜るとか……

「あーだめだ！ 駄目だ！！」

とリクオはその茶色い髪を引っ掻き回した。薄い陽の光に映える茶水晶の瞳が溜め息をつきながら下を見つめる。

易々と喰われてやる気はないけれどね……

と微かに笑ったところで、聞き慣れた声がした。

「リクオー」

「苔」

とリクオは走ってきた同い年の少女を抱きしめた。

「リクオ、明日行っちゃうのね。わらわすごく淋しいの。一人残されて怖い……今まではずっとリクオと一緒にだったのに」

苔の本当の名は、「狐毛」という。彼女も同じ妖怪の許婚者だが、その名を嫌った両親がせめてと漢字だけは普段使うのを違うものにしたのだ。

一月後に十三歳を迎える名家の彼女もやはりその名に怯えている。

「大丈夫！ 僕は死んだりなんかしないよ。それに生きていたら、いつか必ず苔のことを助けてあげるから！」

「 本当？ リクオ死なない？」

私も殺されない？

そう瞳で訴えてくる彼女に力強く頷いた。

「うん！ 大丈夫だよ！ 僕はそう簡単には殺されないって」

とリクオは笑うと、苔の髪から簪を一本抜いた。

「 これ、苔のこと忘れないようにもらっておいてもいいかな？」

「 え……？ 」

苔は顔を赤く染めた。簪を送りあうのは恋人同士と決まっている。

「 う、うん。でも思い出としてよ！」

「 ありがとう 」

リクオはゆつくりと笑った。別に彼女に恋をしているわけではなかったが、一番好きな人間はと問われれば間違いなく彼女の名をあげるだろう。

形見なんて殊勝な感情ではないけれどね……

と薄く笑った。

「あ！ そうそう！ ゆらちゃんが呼んでたのよ。それで来たのだ
ったわ」

「ゆらちゃんか？」

リクオは身を寄せている陰陽師のところの娘の名前をあげた。

「うん！ すっごく探してたわ」

「そうか。じゃあ戻ろうか」

苔と二人手を繋いで秋の葉の生い茂る道を帰って行く。この世で一番大切な人間はこの二人だけーとリクオは繋いだ手の温もりを味わった。

夕暮れが近づく中、ゆらは家の前の石段で座り込んでいた。相当探し回ったらしく表情がくたびれている。

「ゆらちゃん！」

呼びかけると、蛙が跳ねるようにぱつと飛び上がった。

「よかったーリクオ君！ 探しとったんやで！」

本来京生まれのゆらからは京言葉が抜けない。

「どうしたの？ ゆらちゃん」

そう不思議そうに訊くリクオにゆらは綺麗な橙色の布で作った袋を

押しつけてきた。

「京の兄ちゃんに頼んで作ってもらった。御守りや」

「え!？」

とリクオは不思議そうにした。

「秀元の話ではひどいことはされん 飽きられない限り大切にされて殺されることもないやろという話やけど、やっぱり不安や。もしリクオ君がどうしても逃げ出したなっとなら使って。うまく使えば、逃げる間が稼げる筈や」

「秀元って……お父さんを」

「あんなん義理の父や。うちの本当のおとんは秀元の兄や。早よう死んだから兄ちゃんと二人引き取られたんや」

と彼女は渋い顔をした。

自分と彼女は境遇が似ている。

とリクオは思った。もちろん彼女は叔父があり、兄も生きているから天涯孤独というわけではないが。

「ありがとう。いざという時は使っよ」

リクオはその袋をぎゅっと抱きしめた。

「うん、使い方はな」

必死で説明してくれるゆらが可愛く思える。

「もっと、三人でいたかったな……」

暖かな妹のような苔と親友のゆら、それはなんと優しい空間だったろう。

「リク才君」

ゆらは言葉をとめた。そして袋を持った手をぎゅっと握った。

「ごめんな……まだうちに力が足りんから。そやけどどうにか生き延びて。そしたらうちも必死で修行して力をつけるさかい」

「うん」

「リク才君に名前を贈った妖怪は秀元の知り合いらしい。悪い奴やない　　というとった。だから、きつと、大丈夫やと思う」

「ありがとう」

リク才は親友の手をそつと握り返した。

「おい！じじい！　俺に人間を娶れとはどういうことだ！？」

東の大妖怪任侠一家の若頭、奴良リク才は廊下を足音荒く歩き、襖を開いた開口一番そう叫んでいた。

「うるさいのう。そんなに叫んでもまだ耳は遠くなつとらんで」

「聞こえるよう叫んでいるんじゃないかねえ！ 突然どうということだと訊いているんだ！？」

「前から言っていたじゃろう。お前の名を贈った人間がいると」

「それがどうした！？」

「その子が明日で十三になるんじゃない。つまり成人じゃ。だからもう娶らせてよかろうと思つての」

「なんで名前を贈つたら俺が人間を娶ることになるんだよ！？」

「なんじゃ？ お前まだしらなんだのか？」

総大将の祖父はにやりと笑った。

「あの村には時折契つた妖しの妖力を増すことができる人間が生まれる。だから妖しは昔からあの村を見張つて、生まれたようなら名前を贈つて所有権を主張してきたのよ。お前の祖母おようも母の若菜もあの村の出身じゃ」

「な！？ 聞いてねーぞ！！ そんなこと！！」

「皆がとつくに耳に入れと思うとつたわい。とにかくお前と年も似合いだと思つたから贈つておいた。気にいりや寿命を半分やつて嫁にすればええ。その分妖力が下がるが、何度も契ればすぐに取り戻せる。嫁にせんでも、情人にして生きている間中妖力を増幅することもできる。どうしても気に入らななら、一夜妻で里に帰せ

ばよい。どれにしたってお前には悪い話ではないじやろうが」

「何勝手なこと言ってるんだよ！ 本人にしたら生贄と大差ないじやねえか！？」

「あの村は東の奴良組、西の京都、南西の四国という妖怪の大勢力に囲まれながら、そういう人間を出すことで妖怪の襲撃から身を護ってきたんじゃない。勝手なのはお互い様よ」

総大将はキセルを灰盆にかんと押しつけた。

「とにかく、明日はめでたいお前の初娶りじゃ。秀元の話だとかわいい子らしい。せいぜい嫌われんようにしろよ」

「待て！ じじい！！」

しかし孫の声などどこ吹く風で、総大将はひよいひよいと部屋を飛びだしていつてしまっていた。

翌日、人間のリクオは朝から見たことのないご馳走に囲まれていた。

秀元の家には村中の人間が集まり、朝から鯛だ酒だとまるで祝言のような雰囲気だ。

その傍らで、リクオは別の部屋に連れて行かれると、着慣れた着物を脱がされ、真っ白な着物を着せられた。よく見れば白地に白糸で鶴や松が刺繍されており、それが梅や竹と共に裾まで施されている。

る。

もしもこれが裾が長く、後綿帽子でも被せられれば白無垢の花嫁衣装に見えたことだろう。

帯は細帯で、それも完全な白だった。

まるで死に装束だ。

着ながら、リクオは小さく呟いた。

夕刻の逢魔ヶ時、妖怪たちは朧車と共にやってくるらしい。みんなが派手にやっているのは、もうじき対面しなければならぬ恐怖を紛らわすためなのだろう。

リクオの仕度が整った頃、部屋に秀元がやってきた。

優秀な陰陽師で、彼が来てからはなんとかこの村を手に入れようと乱暴する妖怪が激減した。大勢力の妖怪とは許婚者を送ることで不可侵条約を交わしているが、そうでない小勢力　つまり雑魚もいる。それらを今までは大勢力の妖怪に泣きついて鎮圧してもらっていたのが、彼一人で全て片付けれるようになったのだ。

当然村人からは絶大な尊敬を集めている。

その彼が部屋を訪ねてきてリクオを見るなり、

「なんや花嫁さんみたいやなあ」

と微かに微笑んだ。

「いつそのまま嫁さんにしたいぐらいやで」

「あなた男でしょう！」

とリクオは噛みついた。

「まあまありクオ君、気が高ぶるんは仕方ないけど落ち着いて聞いてや」

と優しく宥めた。

「奴良ちゃん　リクオ君が行く奴良組は東の大妖怪任侠一家や。正直、当主は人間の肝を喰らう趣味などない。ので安心してや。気に入られれば一生大切にもらえるやろうし、気に入らんなら一晩で帰してもらえる筈や。どっちにしても悪い方には転ばん。肩の力抜いて、ちよつと間だけ我慢しとり」

「　それは……やはり一晩は用があるということですよ。何をされるんですか？」

「大丈夫！　生き血啜ったり、手足バラバラにして喰われることはありえへん！　ちよつと目を閉じてたらすぐに終わる」

朗らかに言い切ると、秀元は

「大丈夫、別嬪さんやから」

とからから笑って出て行ってしまった。

後にはリクオが一人部屋に残された。

秋の風が優しく室内に吹き込んでくる。空は高く澄み、優しい秋の日差しがそこからこぼれるようにさしこんでくる。

遠くで大人達の酒盛りする声と、高い百舌の鳴き声がした。

庭によく見ると白い椿の花が蕾をつけている。

ふとそれを手にとってみたくなり、リクオは縁側から外に降りた。そして二三部屋離れたところの前にある椿に近づくと、そつと手を伸ばした。

「いよいよあの子も妖怪の慰み者か」

手が椿に触れる前で止まったのは、広間から響いてきたそんな大人達の声だった。

「契った妖怪の力を増幅するなど疎ましい能力じゃ」

「あの家はこれで二人目じゃけ、血筋かもしれんいう」

「だが今度は男じゃ。前はそのまま嫁になつたからよかったようなものの、男では飽きれば里に帰されてくるじゃろ」

「くわばらくわばら。妖怪に触れたそんなおぞましい子堪忍じゃ」

「じゃが十三では放り出すわけにもいかんて」

「できるだけ長くかわいがってもらえるのが最良だのう　村にとつて」

「ああ、そんな子帰ってこられても迷惑なだけじゃからのう」

ぱきりとリクオは椿の枝を握り折っていた。

今聞いた言葉が頭の中でぐるぐると回っている。

慰み者！？　妖怪の！？

凄まじい目つきで白い椿を見つめる。

妖怪の力をあげるためだけに？

ぶちりと音がして、椿の枝を力任せに引きちぎっていた。

その日の夕刻、逢魔ヶ時の闇の中を一台の豪勢な車が空を走ってきた。牛車につけられる御簾を下げた車で、側に二人の鴉天狗がついている。

「これはこれは、ようこそお越し下さいました。ささ、中へ。祝いの酒と肴を用意してます」

村の長が出てきて、震えながら頭を下げると、鴉天狗は言った。

「結構。儂らは若の許婚者を受け取りに参っただけ　お引き渡し願おう」

みんながその言葉と異形の姿に体を小さくし、必死で頭を下げている中、秀元が白装束のリクオを連れてやってきた。

「これがリクオや。大きゅうかわゆうなったやろ」

自分の傍らに立つ白い椿の蕾を髪に挿したリクオの背中を押した。

「おお……それは若のお名前。確かに許婚者殿を受け取った」

リクオは背を押されるままに、一步前に出ると、秀元から鴉天狗の手へと引き渡された。

彼らは主君への捧げ物を恭しく扱うと、連れてきた朧車に乗せた。

御簾が下ろされ、引く牛も馬もないのに車はゆっくりと軋み、がたんごとんと動き出す。それが突然斜めになったかと思うと、そよいだ御簾の間から宵の月が見え、車は空へと飛び立った。

何が見えるわけでもないのに一度だけ窓からリクオは村を振り返った。

蒼……

きつと泣いてくれている彼女の顔が一瞬思い出された。

空の旅は一刻余りだった。やがてぎしぎしと車が降下を始めると、どこかの屋敷に入る気配がした。

そして車が玄関につけられ、鴉天狗の声に従い降りる。

目の前には、長い銀の髪を後ろに靡かせた金の瞳の妖怪が立ち、やってきた子供をじっと見つめていた。

ほかにも首の浮いた妖怪や、納豆小僧、真っ白な髪の子女の妖怪もいる。九十九神らも後ろから若の許婚者を一目見ようとわらわらと集まっていた。

よかった。俺より小さい！……それに予想よりはかわいい。

妖怪のリクオは無言で見つめながら、ほっと胸をなで下ろしていた。

正直どんな人間が来るのか不安だったのだ。もし自分より背が高く、太っている大女だったら、どうしようと思っていた。だけど目の前にいる子供は年よりも小柄で、大きな茶水晶の瞳が爽やかだ。

「お前さんが『リクオ』かい？」

祖父も横からその姿を覗き込んで、これなら上々といった感じで尋ねた。

「はい。僕がリクオです」

人間のリクオは臆することなく答えた。

「そうかそうか！ 別嬪さんに育った！ うん、僕？」

「僕……」

と妖怪のリクオも呟いた。

「男じゃねえか！？　どういうことだ！？　じじい！！」

「おかしいのー生まれた時の知らせでは確かに女の子じゃったんじゃないが……」

「俺に男を抱けてか！？」

「うつむ……」

と祖父は扇子を口元に持ちながら、低く呻いた。

そしてしばらく考えていたが、やがてぱんと扇子を手で打った。

「よし！　臨機応変に対応！　嫁にするのでなければ何も問題はなし！　このまま続行！！　側近達、ちと説明してやれ」

「待て！！　くそじじい！」

「醜女よりかわいい少年の方がマシじゃと思え。とにかくみんな若の初娶りじゃ。宴会じゃー！！」

うわーと妖怪たちが歓声をあげ、

「若！　おめでとうございます！！」

「おかわいらしい伴侶でお似合いですよ！」

「初娶りおめでとうございます！」

と次々押しかけ祝辞を述べていった。

その中で、人間のリクオに長い黒髪の女の妖怪が近づくと、

「ではリクオ様は、こちらへ。ご案内します」

と自分より随分小さな姿を別室へと導いて行った。

何が問題なしだ！

夜着で廊下を歩きながら、妖怪のリクオは呟いていた。

あの後、側近達からやり方を教えられたが、正直自信がない。

相手は男で、自分は初めてなのだ。しかし妖力があがっていないければ、何もなかったとすぐにばれるだろう。

とにかく今夜をさっさとすませて、明日帰ってもらおう……

妖怪の側に長くいたい人間などいないだろうから、これが最高の解決法だろうと妖怪のリクオは思った。

毛倡妓に教えられていた部屋の襖を開け、中に入る。

中では淡い行灯の光の中、白い褥の横で人間のリクオが白い着物に白い椿の薔を髪に挿して身を固くして座っていた。

考えてみれば、こいつが一番の被害者なんだよな……

ふとその前に立ちながら考えた。

村の生贄にされ、望んでもいないましてや妖怪に抱かれることになるなんて……

できるだけ優しくしてやろうと、そつとその身に手を伸ばした。

その途端指の先に焼けるような痛みが走った。

見れば皮一枚が切れて浅く血が滲んでいる。

「僕に触るな！」

顔を上げた人間のリクオは金色に光を受けて輝く懐剣を手にしながら、妖怪のリクオを憎悪のこもった瞳で見つめていた。

「妖怪の慰み者にされるぐらいなら」

人間のリクオは懐剣をぎらりと輝かせた。

「お前を殺してやる！」

戦い開始

二人を照らす行灯の光が闇の中でゆらりと揺れた。それに伴い、向かい合い立つ二人の影も大きく揺れる。

「俺を殺すだど？」

妖怪のリクオは指先に薄く滲んだ血を舌で舐めとった。

「面白え。やれるもんならやってみろ」

にやりと笑うと祢々切丸を取り出した。

この退魔刀ではもちろん人間のリクオは切れない。だが殺さず適度に打撲を与えることはできる　と妖怪のリクオはすらりと刀を抜いた。

二つの刀が金色の光を放つ中、先に動いたリクオは妖怪の方だった。

大きく踏み込み、その小さな体めがけて刀を振り下ろす。

しかしそれは頭の上に構えた懐剣で鋭い音と共に受け止められた。そして横に流される。

長い刃が横にそれた一瞬の隙に踏み込むと、人間のリクオは妖怪のリクオの脇腹めがけて懐剣を挟るように突き出した。

「つう……!!」

それを構え直す暇のなかった妖怪のリクオは刀の握りの部分で受け止めると、突きを横にそらした。

突進をかわされ、無防備にさらけ出すことになった背中にむかつて構え直した祢々切丸が振り下ろされる。

とつた！

と思った。しかし背中を向けたまま、懐剣だけが振り戻されその太刀を受けた。

正直この姿勢で受け止められるとは思わなかった。

「やるじゃねえか」

妖怪のリクオはにやりと笑った。

人間でここまでやれる相手は初めてだった。

腕は俺と互角……ぐらいか？

「自分が妖怪に差し出されると知った日から毎日鍛えてきたんだ。簡単にやられはしない！」

と人間のリクオは言った。

こいつ面白い。

妖怪のリクオは一度身を離すと、祢々切丸をぐんと突きの形に変え

て飛び込んだ。

渾身の突きだ。受け止めようと懐剣ならびびが入るはずだった。

しかし人間のリクオは受け止めず、その小柄な体を低くすることでかわした。そして上にある妖怪の首めがけて懐剣を突き立てようとする。

それを左手でその小さな体ごと吹き飛ばし、妖怪のリクオはかわした。

吹き飛ばした体めがけて祢々切丸を首もとに突き立てる。

そしてその体がこれ以上暴れないようにその上に跨った。

「俺の勝ちだな」

妖怪のリクオは誇り、首もとの畳に突き立てた祢々切丸から手を離れた。

「それじゃあ、大人しく」

大人しく……何をするんだった？

と思い出したところで思わず一瞬体が固まった。

その刹那、その金の目に鋭く削られた椿の枝が一ミリの隙間で当たられた。

「大人しく 何だって？」

祢々切丸はすぐには抜けない。抜く間に目を抉り取られるだろう。

「……わかった。今夜は何もしない」

冷や汗を流しながら、そう敗北宣言をするしかなかった。

それでも蕾の椿の枝をのけないリクオに、妖怪の方は証明するよ
うに体を離すと、敷かれた白い褥に行き、一人ごろりと寝た。

「何にもしねえから、お前も寝ろ。今日はくたびれただろう」

そう言うのと背中を向けてしまった。

暫く部屋の端から動かなかった人間のリクオだが、やがて掛け布
団だけ持って部屋の端に行くと丸くなってしまった。

本当はとても疲れていたのだろう。暫くすると静かな囁くような
寝息が妖怪のリクオの耳を打った。

翌日、朝部屋から出てきた若を確かめようとみんながわらわらと
朝食に向かう若の姿を見に来た。

しかしその妖力があがった気配は一向にない。

これは……

みんなが一瞬で悟った。

失敗だ！

「いやあー失敗かあ」

「若の姿ならおとせない相手なんていそうにないのになあ」

「初めてで緊張したとか？」

勝手なことを言い合う妖怪達に、人間のリクオはそしらぬ顔でご飯を食べている。しかし妖怪のリクオの方はそうはいかない。

「なんだが……男としての誇りにかけてひけなくなってきた……！」

二日目の夜、みんなの大声援を受けて向かった褥で、とにかく口説いてみることにした。

「なあ、お前の本意じゃなからうが、俺はお前が相手でよかったと思っただぜ？　すごくかわいいし、綺麗な目をしている」

「へえー妖怪って男女どっちでも平気なんだ。みんな両刀？」

「いやいや、俺はごく普通に女がよくて……」

「なら僕にそんな風に思うわけないじゃん」

「う……」

三日目、みんなが必死に応援してくれるのが悲しくて、強引に出てみることにする。

相手は人間だ！ 力なら妖怪の俺の方が上な筈……！

無理矢理体を抱き上げ、褥に連れて行くと、全身で体を押さえ、着物の合わせに手をかけた。

その時、自由になった腕が、一瞬のうちに首に回されたと思うと、延髄にぴたりと簪を押しつけられた。

「続ける？」

「……今夜は遠慮します」

四日目、みんながそつと遠くから見守る中、部屋に入ると、今夜こそ決着をつけようと畏を使ってみる。

姿が見えなければ、簪で狙うことも逃げることもできない筈……

事実、見えない相手に褥に押し倒され、着物をくつろがされたリク才はひどくなまめかしくみえた。

今夜は行ける！

そう思い、胸に口づけた時、褥の下端から隠していた紐が取り出され素早く首にまかれた。

口づけで頭の位置がしれたのだ。

「やめてくれねえかな？ 洒落にならねえ」

ぎりぎりと言われる紐に姿を現すと、妖怪のリク才は人間のリク才

を冷や汗で見つめた。

「やめる？ どっちが？」

「……すみません。謝ります」

五日目、物陰からこそこそ囁いている妖怪達を後ろ目に部屋に入ると、説得を試みる。

「なあ、だから一夜だけでいいんだって。そしたら元の村に帰してやるから」

「ふうん……やっぱり一夜の慰み者なんだ」

「いやいや、お前が構わないんなら、俺はお前を恋人として一生大切にするぜ？」

「それって要するに情人でしょう？ つまりお妾だよね？」

「だって嫁にはできねーし……でも一生大切にするから！」

「うそうそ。最初のが本音なくせに。体だけ得たら早く厄介払いしたいものね」

……挫折。

柔らかな秋の日差しが青い空を照らす風景が見える部屋で、総大将ははからからと笑った。

「見事に五連敗か！」

「笑いごとじゃねえ、じじい」

孫はその前でぶすつとした顔で酒を飲んでいた。

「いやいや、しかしなかなかの強者じゃのう。お前の許婚者は！」

扇子を広げ、楽しげに笑う姿に妖怪のリクオは思わず毒づいた。

「じじいだろうが！ あんな妖怪以上に凶悪な奴を許婚者にしたのは」

「こうなると女でなかったのが実に惜しい。女なら是非お前の嫁にと言いたいところじゃ」

「冗談じゃない！ 命がいくつあっても足りねーよ！」

「物騒なものほど魅力的なもんじゃぞ？ お前、まだ思考がお子様じゃな」

「そんな魅力わかりたくもないわー！」

その時、とたとたと廊下を歩く音がすると、からりと半開きの障子が開かれた。

「おじいちゃん。呼んだー？」

見ると人間のリクオがにっこりと顔を覗かせている。妖怪のリクオはその見たことのない表情と言葉に固まった。

おじいちゃん？

「おお、リクオか。昨日の続きの暮をしよう。今度は負けんぞ」

「うん。でも僕も負けないよ、おじいちゃん！」

「おい、じじい……」

妖怪のリクオは目の前で展開されている光景に思わず叫んだ。

「何おじいちゃんなんて呼ばせてんだよ！？」

「うるさいのう。わしはリクオの名付け親で、しかも許婚者の祖父だぞ？ おじいちゃんと呼ばせてもかまわんじやろが」

「くそじじいのくせに何を偉そうに！」

「こんな反抗期の孫より素直な許婚者の方が孫としてかわいいて。本当に嫁にほしかったのお」

飴食べるかと人間のリクオに菓子入れを差し出している。

素直にそれを受け取る人間のリクオを絶句して見つめていた。

このくそじじいと二重人格者が……！

そこに妖怪のリクオの母若菜がやってきた。

「リクオー、ここにいるの？」

「お袋」

と妖怪のリクオは障子の方を振り返った。

「ああ、リクオじゃなくて、もう一人のリクオの方……ってややこしいわね」

「ある妖怪は僕を昼のリクオって呼ぶよ！ 人間は活動時間が昼間だからって！！」

「ああ、それいいわね」

にこりと若菜は手を打った。

「じゃあ今度から昼のリクオと息子の方は夜のリクオって呼び分けましょうか」

「そうじゃな。長期戦になりそうじゃし、その方がわかりやすいじやろっ」

祖父もからからと笑った。

「じゃあ、昼のリクオ。いつまでもその白い着物じゃなんだと思って、新しいのを縫ってみたの。ちよっと袖を通してみてくれる？」

「え……僕に新しい着物？」

と昼は照れながら戸惑っている。

「そう！ 夜は派手なのを好むけれど、あなたのはちょっと落着いた色のかわいいので作ってみたの！ 着てみて」

「でも……いいの？ 僕なんかに……」

「もちろんよ！ それから私のことはお母さんと呼んでね！」

「お母さん……」

薄く頬を染めながら昼は呟いた。

「おい？ お袋……？」

呆然としている夜に若菜は昼のリクオの肩に手を置いて、じゃーんといった感じで打ち明けた。

「実は昼のリクオは私の双子の妹の子なの！ だからあなた達は従兄弟同士！ 妹亡き今、一番近い親戚の私が親代わりになるのは当たり前でしょう？」

「聞いてないぞ！ そんなこと!!」

「私もこの子から聞くまで知らなかったんですもの。あの子が子供を産んだことも死んだことも……」

そう若菜はうつすらと目に涙を溜めた。

「あの子は、どんな風にして死んだの？」

「隣村の法要に夫婦で出かけて……帰り道で土砂崩れに巻き込まれ

て」

「そう……幼い子を残してさぞ心残りだったでしょうね……両親、あなたの祖父母は？」

「母が婿をとって家を継いですぐに他界して……」

「そう……私が妖怪の許婚者で、ただでさえ白い目で見られていた家だったから幼いあなたには辛かったでしょうね。でもこれから私がお母さんよ！ あの子のしたかった分してあげる！」

と昼のリクオの手を引いて笑顔で連れて行ってしまった。

その途中ですれ違った青田坊や納豆小僧に昼は陽気に挨拶をしていく。

俺の知らないいつの間にあんなに妖怪や家族に馴染んでん……

ぶすつと夜は面白くなく呟いた。

祖父の部屋を出て暫く廊下を歩くと、廊下の先で何やら妖怪達が集まっているのが目に入った。

「俺は一週間後に一分銀だ」

「じゃあ僕は五日後に一分銀」

「では拙僧は三週間後に……」

「みんな何をやっているんだ？」

夜は集まっている妖怪達に声をかけた。

「わ、若……」

驚く妖怪達の中で首無がにっこりと頭だけで振り返った。

「若もやりますか？ 若当て」

「何だ？ その若当てって」

近づくとふわふわと浮く笑顔に尋ねた。

「若がいつ許婚者殿をおとせるか、みんなで賭けているんですよ。ちなみに私は半年後に一分です」

「お前！ 遠回しにおとせないって思っているな！？」

「いえいえ、報われない努力も続ければ実を結ぶと思っています」

「報われないとか断定するなー！」

「ちなみに総大将は一月後。若菜様は二か月後です」

「みんな俺で遊んでる！ そう思っているということだな！？」

その日の夕方、夜のリクオは初娶りの祝い酒を持ってやってきた義兄弟の鳩と二人で酌み交わしていた。

「はっはっはっ！　そういうことか！」

鳩は酔いながら豪快に笑った。

「薬鳩堂に来た本家の妖怪からどうもお前の初娶りがうまくいったときいたんで、これはやっぱり相手が男だから食指が動かねーんじゃないかと思って女にする薬作ってきたんだが、それなら媚薬の方がよかつたなあ」

と横に置いた瓢箪を手を持った。

「媚薬……」

「おう。どんな貞淑な女でも泣いて求めてくる強烈なやつ作ってるぜ」

「いや……さすがにそこまでは……」

夜は酒を呑む手を休めて呟いた。

その時、突然後ろから声がした。

「誰に媚薬を盛るって？」

と昼が酒のおかわりを持って現れた。

「ひ、昼……」

目に見えて夜のリクオの肩が飛び上がった。

「おう！ お前さんが噂の許婚者か。こりゃ別嬪さんだ！」

「あまり夜に変なこと吹き込まないで下さいよ。被害にあうのは僕なんですから」

お前がいつ被害にあった！？

毎日指先を切られたり、首を絞められた夜は心の中で叫んだ。

今回の事態の一番の被害者は絶対俺だ！

「なに？ お前ら昼と夜って呼び合ってたの？」

「ええ。同じリクオですから、紛らわしいでしょ？」

「なら、リーちゃんとかりくたんとかでもよかったんじゃない？」

「……誰かが言い出しそうだから事前に手を打ったんですよ」

発案者は実はお前か！？

思わず夜は昼のリクオを振り返った。しかし昼は平然と徳利の交換をしている。

「あはは！ そりゃあ惜しかった！ 一度本家の若頭をりくたんって呼んでみたかったぜ」

「僕がリーちゃんなら許します」

嫌だ！ 本家全員にりくたんって大合唱されるなんて！！

想像しただけで恐ろしい……

こうなると平気な顔でお酌をして、空の徳利を下げていった昼の機転ありがたい。

その後ろ姿を見送って、鳩はにやりと笑った。

「ふうん。あれは確かに手強い」

「わかるか！？」

「相手をよく観察して症状を知るのが俺の生業だ。俺の見立てじゃ超特級だ。これなら二日じゃなく三か月に賭けとけばよかったぜ」

「おい、賭けって……」

「おう。さっきそこで本家の妖怪に若当てに誘われてな。女体化の薬で二日に賭けたが一分損したぜ」

遂に本家以外にまで広がり始めた……

暗く夜は打ちひしがれた。

鳩が帰った後も、なんとなく月見をしながら酒を呑んでいた夜だったが、そこにぬるくなった徳利を熱燗に替えようと昼が新しいのを持ってきた。

「温かいの呑まないと、秋は体が冷えるよ」

その言葉に、

へえ、優しいところあるんだな。

そう思いながら杯に注いでもらった。

ぐつと喉を通っていく酒は焼けるように熱くて体を暖める。

「どう？」

昼は尋ねた。

「うん、うまい」

こいつと二人月見も悪くねえな……

そう夜は静かに自分を見つめる昼を見ながら心で呟いた。

「やっぱり妖怪にこの程度の毒じゃ効かないか」

ぶはつと夜がむせた。

「毒って！ お前……！？」

「人に媚薬を盛る相談なんかしているからだよ。これで一服盛られる気分がわかっただろう」

とぬるくなつた徳利を持って、すたすたと歩いて行つてしまった。

前言撤回だ！ やはりあいつといるとろくな目にあわない！

さすかにもう酒を呑む気分じゃなくて、杯を投げ出したまま池に映つた月を見つめていた。

すると毛倡妓がいそいそとやってきた。

「若、おかわり遅くなつてすみません」

しかし夜は力なく首を振ると、杯を毛倡妓の方に押し返した。

「いい。……当分酒を見る気もおきん」

すると毛倡妓は意外なことにくすりと笑つた。

「あら それはようございました」

とくすくす笑っている。

「最近お酒が過ぎるようでしたので、少し控えてもらえないか昼の
リクオ様に説得を頼みましたの。その様子ですと、うまくお話下さ
いましたのね」

え！？

夜は目を見開いて毛倡妓を見つめた。

「酒をやめるよう……昼に頼んだ？」

「はい。昼様のお蔭でやめられたのではないのですか？」

「いや　そうだけど……」

俺の為？

よく考えたら、色んな武器を隠していた昼だが、毒まで用意していたとは思にくい　ような予想外に持っいていそうな気がする。

どっちなんだ！？

わからない真相に夜は頭を抱えた。

水面の月がゆるりと揺れた。

その日の夜は結局褥に行かず、一晩月を見て過ごした。

翌日、庭を歩いているとまた妖怪達が集まって何か話している。

「では俺は三日に一分！」

「私は二日に一分！」

「俺は今夜に賭ける！」

また若当てか……

げんなりして、一言釘を刺しておこうと後ろから首無に声をかけた。

「おい、首無。若当てで遊ぶのもいい加減にしとけ」

「あ、若」

首無はまた頭だけで振り返った。

「違いますよ、これは若当てじゃありません」

「？　じゃあなんなんだ？」

夜は尋ねた。

「これはいつ若が我慢できなくなつて昼のリクオ様に媚薬を盛るのです」

「何だと！？　その話どこから聞いた？」

「昼のリクオ様から　鳩様と相談してたつて」

やられた！

直感的に夜は思った。

それでも男の自尊心にかけて媚薬は使えない……

媚薬に頼つて許婚者を抱いたなど、あまりに男として情けない話だ。

そこまでしないと許してもらえなかったというのも恥だ。

「まあ、私は使わないに賭けたんですけどね」

と首無は明るく笑った。

その声に夜は生まれた時からいる側近を見上げた。

「まあ 余程追い詰められないと若がそんなことをするとは思えないというか……」

その笑みは大丈夫、ちゃんとわかってますよという風に見えた。

「首無」

だからほろりと言葉が洩れた。

「俺はどうしたらいいんだと思う？ あんなに嫌がっているんだ、このまま村に帰してやった方がいいのか？」

「そうですね……」

と首無は常にない若の弱気な態度に苦笑をこぼした。

「ご自分に置き換えてみてください。もし誰か人間の男があなたの妖力が欲しいので抱かせると言ったら、それに従いますか？」

「その場で殺す」

「でしょう？ それが今の昼のリク才様とあなたの関係ですよ」

「う……」

夜は言葉に詰まった。

「愛してるから　　と言うのでなければ、惚れさせなくてはいけません。男としても友人としてもいい。協力を惜しまない　　そう思わせられなければ、体なんて差し出してくれません」

「……どうやって」

「先ずお互いをよく知ることです。少しずつ時間をかけて、ゆっくり話をして。そしてお互いの良いところを知っていく。そしたらきつと分かり合えます」

「　　ゆっくり……時間をかける……」

「そう。半年ぐらいかける気持ちでいけば成功する筈です。私の小遣いの為にも」

「お前、最後の本音は隠せ」

と夜はむっと膨れた。

「まあ、冗談はさておき」

首無は笑った。

「私はあなたが三代目を継ぐ時、あの方には是非その側にいてほしい。あの方はあなたにない狡猾なしたたかさをお持ちです。それはきつとあなたの背後を守るでしょう」

「首無」

「それにあの方が来られてから、あなたはずっと年相応の表情が増えた。狡猾なあの方の前ではつっぱれないのじゃありませんか？」

「だっていつも先手を打たれて……」

「そういう本音をさらけだせれる方が必要なんです。上に立つ者には」

大丈夫、きっと仲良くなれますよ、と首無は穏やかに笑った。

その夜、虫の声が響く中、夜のリクオは後から部屋に入ってくると、昼の前を素通りして一人褥にごろんと横たわった。

暫くそれを見ていたが、何もして来る気配がないと思うと、昼はいつものように掛け布団だけ持って部屋の端に移動しようとした。

布団を握るその手を感じ、

「おい」

と夜は声をかけた。

「もう無理矢理はしねえよ。ちゃんと敷き布団で寝な」

それは同衾しろと言っていることだ。昼の手が止まった。

「いくら妖怪だって毎日掛け布団ないと寒いんだよ。お前の同意なしに無理強いはいしないから、安心しな」

少しの沈黙が落ちた。

無理か……

今までの行動が行動だ、と夜は思った。しかし、

「わかった」

と返事が返ると、自分の上にはさりと掛け布団が落ちてきて、背中ごしに何かが丸まっている気配が伝わってきた。

布団の隙間を通してじんわりと熱が伝わってくる。

その温かさがほんの少し二人の距離を縮めたような気がして夜の心がほのかにぬくもった。

椿の簪

とにかくよく昼のリクオのことを知ろうと、夜は翌日からじっと昼の行動を見続けた。

昼のリクオはとにかく一つ一つが礼儀正しい。食事をする時もちんと正座だし、よく見ているとご飯粒一つ残さずきれいに食べる。雪女の作った料理は凍っていて、秋の朝の腹にはこたえるだろうに、そんなことおくびにも出さず、本当においしそうに食べている。

慣れている本家の人間ですら、暖かい茶をどばどば喉に流し込んでいるのだ。

「御馳走様でした」

そう言うと、自分の分の膳は自分で片付けようとする。いや、ほかの食べ終わった妖怪達の間もだ。

「夜はもういいの?」

と尋ねてこられて夜は内心驚いた。見ていたのに気付かれたかと思っただのだ。

「ああ、終わってるぜ」

平静を装って答えた。

「だめだよ? まだ味噌汁底に残っているじゃない」

「お前はお袋か？」

残っていると言ってもほんの一口だ。すすればすぐになくなるだろう。氷の塊と戦いながらだが。

「今日食べないと明日の分が減るんだよ？」

「それは減らすと言ってるな」

まったく、と言いながら味噌汁と格闘する若の姿を本家の妖怪全員が暖かく見守った。

台所の手伝いをしたかと思えば、次は庭で草引きをしている。

縁側で煙管片手に見つめていると、本当にくるくるとよく動く。働くことがまったく苦になっていないようだ。

「昼様！ そんなことは私達でやりますから！」

慌てて下働きの妖怪が走ってきた。

「いいのいいの。僕こういうの好きなんだから！」

あれは本当に毎晩俺に悪口雑言はいている昼の口か！？

その爽やかな人好きのする笑顔に思わず頭を抱えそうになる。

「リクオ様、どいてください」

と雪女が言つと、周り一面に霜を降らせた。

「さあ、これで雑草は全部霜焼けを起こして駄目になりますよ」

とにこりと笑う笑顔に、昼はおーっと手を叩いている。

「すごいや！ 僕もそんな技使いたいな」

お前は言葉で相手を凍らせるから、それ以上余分な冷気はいらん！

思わず頭が痛くなって溜め息が出た。

そんな夜の様子を本家の妖怪はみんな物陰から見つめていた。

「若 あんなに熱心に見つめてらして……」

「そうですかあ。許婚者殿に片想い」

「でも受け入れてもらえず、さりとて無理強いもできず」

「切ないですなあ……」

よし！ 本家は一致団結して若の初恋を応援しよう！

はなはなだしい誤解から奇妙な団結が生まれていた。

日中働くか祖父や妖怪の相手をしていた昼だったが、夜になるとまた台所の手伝いをしみんなが呑む酒やつまみの用意をしていた。

本当によく働くな……

最早夜は呆れていた。

今日一日見ていて気がついたこと、それはどうやらこいつの腹の底を見たことがあるのは自分だけらしいということ。

首無などは気がついていようだが、ほかには見事な猫かぶりだ。これだけ長時間爽やかな愛想のよい姿を見せられると、最早どっちが本性かわからなくなる。

その晩、本家妖怪達の生温い眼差しに見守られながら寝間に入つた夜は、脱いだ着物を丁寧に畳んでいる昼を見つめていた。

母、若菜が作った落ち着いた赤茶色の着物を皺を伸ばしながら、肩を合わせ袖を折り畳んでいく。

それは大事な物を扱うようにひどく丁寧な所作だった。

「その着物、気に入ったのか？」

だからなんとなく尋ねた。

「うん、すごく嬉しい」

「普通の着物だろう？」

特に派手な模様が入っているわけでも、高級な生地が使われているわけでもない。普段着用の無地の着物だ。

「だって僕、僕用の新しい着物ってほとんど作ってもらったことないから」

「うん？」

思わず聞き返した。

「ほら　僕の親って早くに死んじゃったじゃない。だから秀元さんに引き取られる迄は村の縁者の家を転々として育ったんだ。でもどの家も子沢山で、居候は食べさせてもらえればいい方だったから」

着物はお古ばかりだったんだよ、と昼は笑った。

「秀元さんのところに行つてからも竜二さんのお下がりが多かったし……それはかまわないんだけど、やっぱり自分用って嬉しい」

「お前……」

意外と苦勞してるんだな……

と言いかけてやめた。妖怪の許婚者が白い目で見られたと母は言っていた。

だとしたら、こいつの苦勞は半分以上俺が背負わせたのか……

なんだか、悲しくなつてその小さな体を抱きしめてやりたくなった。勿論即殴られるとわかつているからしない。

ひょっとしたら、こいつの体が年よりも小さいのも……

あまり満足に食べさせてもらえなかったのかもしれない。

食べないと明日のご飯が減るんだよ？

本当にそんな生活だったのかもしれない。

せめてここにいる間ぐらいは苦勞かけさせないでいてやりたい

……

布団の中に入ってきて、くるりと向けられた小さな背中にそう思った。

翌日、爽やかに晴れ渡った青空の下、それは青田坊の一言から始まった。

「若！ 鍛錬の為、本家内武闘戦をやりましょう！」

「武闘戦！？」

喧嘩好きの妖怪達も思わずびっくりした。

「そうです！ たまには若の勇姿を見せてくだされ！」

このままではただの飲兵衛とわかれてしまいます！

その言外の言葉を本家の妖怪達は敏感に感じ取っていた。

ああ……そういえば青が賭けていたのは今夜だったわね……

後一週間は粘ってほしいんだが、いや後三日……と様々な思惑が本

家の中を交錯したが、

「やりましょうよ、若」

という首無の言葉で決まった。

「牛の歩みも一歩からですよ」

ああ……そうね。いくらつこよくても、手の平を返すタイプじゃないわ……

となるとここは若の初恋の為自分の賭け金の為、そして目先の楽しみの為、本家は一致団結することになったのだ。

やるとなるとお祭り喧嘩大好きの奴良組のこと、盛り上がる盛り上がる。青い空の下で、

「いけー！ 青ー！」

「そこよそこ！！ 黒ー！」

と白い雲にまで届くのではないかという歓声が響き渡った。

雪女が相手を雪だるまにして動きを封じれば、毛倡妓が黒髪を扇のように広げて攻撃する。首無が紐で相手を吊り下げると、河童が水球を投げってくる。納豆小僧が納豆を飛ばし、ささ美が飛んで避ける。

「よし！ 次は俺の番だな！」

夜は活き活きとした顔で祢々切丸を持つと黒羽丸の前に立った。

「若。一手御指南お願い致します」

「おう。お前とがちでやるのは初めてだな」

と二人は向かい合った。

本家の若頭とその側近の戦いだ。誰もが思わず息を潜めた。

それを縁側に座布団を敷かれて昼は座って見ていた。さっきまで夜がいた隣の座布団は今空になっている。

じつと夜の戦いを見つめる昼の様子をみんな片目でちらりと見つめ、

どうか若の良いところを見せられますように！

切実に祈った。

考えてみれば、閨で話すか酒を飲んでいるか飯を食っているところしか知らないのでは、ろくでなし街道まっしぐらだ。ここらで軌道修正しておかないと本当に自分の小遣いも若の初恋もやばい。

みんなが望んだ通り、若はさして苦戦することもなく、自在に祢々切丸を振り回すと、実に活き活きと本家の妖怪達を峰打ちで倒していった。もしくは首もとに刃を突きつけ、敗北宣言をさせる。

雪女は惜しみなく拍手を送った。

さすがは若！ 素晴らしいです！

これで昼のリクオ様もきつと……と己の憧れる主の恋の成就を願い、そつと横を見た。

昼のリクオは楽しそうに拍手をしている。にこにここと笑っているのに、雪女はほつと安堵した。

「おい、昼」

突然夜が声をかけた。

「お前もやらねえか？」

「僕？」

昼はきよんとしている。

若！？ なんてことを！？

想い人に試合を申し込むなんて完全に想定外のできごとだ。だが夜は笑いながら続けた。

「お前、腕は俺と同じくらいだろう？ 一度太刀と太刀で五分の試合を試してみたかったんだ」

若と同じくらいの腕前！？

さすがにこの発言には本家はどよめいた。

縁側から立ち上がり、太刀を側の小妖怪から受け取りながら言った。

「いいけど……勝つたら何でも一つ言うことをきけとか言わない？」

ぴたりと夜の体の動きが止まった。鈍い沈黙が続く。

若がその手があったかと思っている！

みんなが一瞬にして理解した。

「迷ってる……」

「迷ってますね」

ひそひそと声が囁かれた。

「ふ……」

夜はどうか口元を動かし、笑みの形にした。

「俺がそんな姑息なこと言うかよ」

「強がった！」

「強がりましたね……」

「いやー見栄張るしかないでしょう。先手打たれては」

「うるさいぞ！ そこー！」

思わず夜が祢々切丸を構えた。

「ならいいんだ」

とそれは爽やかににつこりと昼は笑んだ。

だめ押しされた……！

本家の誰もがもう言葉にできず、ただ冷や汗を流した。

何故だろう？ あんなに爽やかな笑顔なのに黒く見えるなんて

……

それは妖怪達の一致した思いだったが、それとはおかまいなく目の前では二人のリクオが剣をかまえていた。

太陽の光を浴びて、刃は眩い金色に輝いた。

最初に動いたのは昼の方だった。大上段から袈裟懸けに夜に切りかかる。

本気だ！

本家の妖怪は息をのんだ。

しかしそれを肩に触れる前に祢々切丸で受け止めると、刃の押し合いを暫く交わし、互いに弾いた。

茶色い淡い髪が光を受けて靡いて、地面に体がつくの一拍遅れ

てふわりと元に戻った。

次に夜がその胴体めがけて打ち込んだ。しかしそれも刀で受け止められる。

夜の金色の瞳がにやりと笑んだ。

「やっぱり勝負はこうでなくちゃな」

今日は得物の有利不利がねえ　と夜は笑った。

「そんなに余裕がある状態？」

と昼は剣を弾いた。

続けて数度剣戟を交わす。

その動きにつられて、夜の銀の髪が楽しげに眩く輝いた。

「楽しいものを楽しんで何が悪い」

それは妖怪の性なのだろう。しかしその言葉に昼もにやりと笑った。

「ふうん　じゃあ、僕も自己流で楽しむよ」

そつ刀を持ち替えると、鋭い突きを繰り出した。

明らかに首を狙ったそれを素早い身のこなしでかわす。かわしざまにその腕めがけて祢々切丸が振り払われた。しかしそれを咄嗟に体を転がすことによって避ける。

転がったまま足めがけて太刀を昼は奮った。

「若！」

思わず雪女が声をあげる。

しかし夜は飛んでかわすと、今度はその太刀をもつ腕を蹴り上げた。

思わず昼が呻き、太刀を手から取りこぼした。

その首の横に祢々切丸を突きつけ、

「今度こそ俺の勝ちだな」

と夜は笑った。

しかし下にあった昼の体が突然持ち上がり、首に片腕が回されたと思うと、その頬に柔らかな唇が押し当てられた。

「！？」

！？

夜も妖怪達も一瞬のことに驚いて声が出ない。

その間にもう片手が首に回され、鋭い簪の先端があてられた。

互いに簪と太刀を首筋にあてあつたまま抱き合っている。

くすくすと昼は笑った。

「どうする？　一緒にせーので刺してみる？」

「……まだ心中するほどの仲じゃねえだろ」

「そうだね」

と二人は息を合わせたように互いの得物をおさめた。

「じゃあ心中したくなったら言ってね。一人分の片道切符用意して
いたげる」

「それは心中とは言わん！　だいたい太刀の勝負じゃなかったのか
！？」

「だから自己流で楽しむと言っただじゃない。妖怪とは体力差がある
んだ。当然のハンデだよ」

今……何かがわかった……

本家の中を何ともいえない空気が駆け巡った。

「これは無理強いできないのではなく……」

「させてもらえないのですね」

「何もない状態から尻にしかれてますよ」

「そうか　許婚者殿の絶対王政だったか……」

無敵が素敵とは！　若ってそういう趣味！？

誤解はまたしてもあらぬ方へ転がるのであった。

夕方、かなり陽が傾いて茜色に染まる空気の中を、昼はその光を映したような剥いた柿の実を持って夜のいる縁側にやってきた。

昼間の騒ぎで疲れたのだろう。夜は夕焼けに染まりながら、いつの間にか眠ってしまっていた。

「こんなところで寝て。風邪をひくよ」

昼は呆れて呟くと、側の部屋からかけてあった着物を持ってきて上にかけた。

それに起きる気配もなく、静かに寝息をたてている。

そんな夜を見ながら、昼のリクオは側の縁側に座り足をぶらぶらとさせた。

銀色の髪が優しい夕日色に染まっている。

まったく……人がいいんだから……

その寝顔を見ながら、昼はそつと内心呟いた。

さっきの試合、夜が使っていた祢々切丸は退魔刀で人間は切れな

いのだと雪女から聞いたのだ。

本当は生贄の僕なんて人並みに扱う必要なんてないのに……

四肢を部下に押さえつけて、自分は強引に突き入れればそれだけで終わる。体を愛する必要などこにもない。それなのに、僕の許容範囲をはるかに越えるようなことはせず、どこか人並みな扱いをしようとする。

初めての夜もそうだった。こちらが寝たふりをしたら、寝込みを襲うことなどせず、言葉通りその日は諦めて眠ってしまった。

次の日もその次の日も、一度諦めたら言葉通り手を出してこなかった。

なんで妖怪の君の方がこんなに真っ直ぐで、人間の僕の方が捻れてるんだか……

寝首をかかれるなど考えもしないのだろう。

ふと、ぶらぶらと動かす足を見つめていると、その膝の当たった袂がしゃんとなった。

二回も自分の身を守ってくれた銀色の簪を取り出し、じっと見つめる。

苔……

彼女はまだ村にいるはずだ。

泣いていないといいけれど……

妖怪の許婚者で、自分とゆらしか友達のいなかった少女を思い出す。

じつと簪を見つめる昼の後ろで、夜は鼻をくすぐる甘い匂いに目が覚めた。

ふと見上げると、昼のリクオが茜色の大気の中、柔らかな髪をその色に染め上げ、茶水晶の瞳が黄昏に紅茶色に透き通っている。

紫がかった青い空の下、その残照に彩られた姿はひどく眩しく透明に見えた。

こいつって……こんなに綺麗だったのか……？

とくんと心臓が一打ちした。

その音が聞こえたわけでもないだろうが、昼が振り返った。

「起きたんだ？」

「ん……ああ」

「惜しい。寝首をかく機会だったのに」

と昼は簪を口にあて笑った。

「お前な？」

がくりと夜はうなだれた。

「冗談だよ。ほら、柿を剥いてくれたんだ。食べるだろう?」

と橙色の木の實を盆ごと差し出した。

「あ、うん」

夜は起きあがるとあぐらをかいた。すると肩からかけられていた着物**が**ばさりと落ちる。

まさかこいつがかけてくれたのか?

信じられない思いでその着物を見つめる。

振り返った先で昼は一個を爪楊枝にさして取ると、いただきます
と言ってからもぐもぐとかじっている。

「うん、おいしい」

昼が嬉しそうに言うので、思わず夜は尋ねた。

「お前　柿が好きなのか?」

「うん」

あっさり返事が返される。

「ふうん、何でも食べてるから嫌いなものなさそうだな。ほかに
何が好物なんだ?」

「あけびに山葡萄、野苺にぐみ。栗も好きだけど、見つからないように焼くのが難しくて」

「見つからないようにって……」

全部山で穫れるものじゃねえか……

夜は絶句した。

「お腹すいた時、薪拾いに行くと行っては山でとって食べてたんだ。後、しめじや椎茸、蒨やつくしも好きだよ」

無邪気にくるりと振り返ると昼は笑った。

「君の好きな物当ててみようか？」

「知ってるのか？」

夜は驚いた。

「先ず酒でしょ？ それからするめに干し鰯、貝紐めざし。後刺身にたたき」

「よく見てるな……」

と夜は驚きを通り越して呆れてしまった。

「君の好みはわかりやすいよ。酒の肴かなまもの系なのは、やっぱり妖怪だから？」

「なまものが好きなのがどうかは知らねえが、単純においしいだろ
うが」

「突然僕の腕かじったりしないよね？」

「するか！ 人肉に興味などないわ！！」

「えー？ 妖怪といえば、赤子の生き肝を食べる話が有名でしょ？
子供は管轄外？」

「俺は内臓系は嫌いなのだ！」

思わず昼がくすくすと笑い出した。

「それって 妖怪としてはどうなの？」

「うるさいなあ。嫌いなものは嫌い！ あの妙に粘っこいのが嫌だ
！」

まるで子供みたいだ。

昼は笑いをおさめることができなかった。

「君って味覚が大人なんだか子供なんだか」

手に持った簪が昼が笑うことにしやしやらと鳴った。

ふと、それに目をとめ、夜は呟いた。

「その簪 誰のだ？」

なんでそんなことを訊いたのか自分でもわからない。ただ本当に口をついて出た。

「気になる？」

くすりと昼が笑った。

「そりゃあ 自分の許婚者が他人の簪持ってて気にならねえ奴はいないだろう」

そうだ、だから訊いたんだと心の中で頷いた。

「僕の一番大切な人間」

昼は簪を宝物を見つめるようにそっと両手で包んだ。

なんだ……そんな奴がいるんだ……

簪ということは女なのだろう。それも普通以上に親密な間ということだ。

なんだか……面白くない。

心で夜が呟く前で、昼は愛しそうに見ていた簪を胸に大事にしまった。

秋の夜を告げる風がふわりと流れて、色づいた木の葉をかさかさと揺らした。

「くしゅん！」

と昼がくしゃみをした。

それでようやく夜は、昼が来てから一週間以上たっていることに気がついた。

秋は気温の移り変わりが早い。一週間もあれば十分に冷え込む。人間ならば、尚更こたえるだろう。

「お前、ひよつとして寒いのか？」

ようやく気がついた事実慌てて尋ねた。

「うん　まあ、少し」

と昼は笑った。

「馬鹿！　なんでもっと早く言わないんだ！　来い！」

そう言うと、夜は昼を自室に連れていき、押し入れを開けて一番上にあつた柳行李を取り出した。

その蓋を開け、色とりどりの着物から羽織を探し出す。青に華やかな菊の大輪を描いた羽織を持ち出すと、夜はそれを昼に差し出した。

「俺のお古じゃ嫌かもしれないが、取り敢えずこれ着とけ。お前ぐらの背丈の時のだ」

しかし昼はじつとその羽織を見つめる。

「それ着たら 代わりに着物を脱げとか言わない？」

「言わねえよ！ どんな変態だ、俺は！？」

「だって君に頼みごとしたら、代わりに抱かせると言われるかと思
つて」

「俺はどこまで極悪なんだよ！？ そんな弱みにつけこむようなこ
とするか！」

「へえ」

にやりと昼が笑った。

「弱みにつけこむような男らしくないことはしないんだ？」

「当たり前……」

はっと夜は気がついた。

やられた……！

これでもうその方法は使えない。いや元々好む手ではないが、先回
りして手を打たれたのは否定できない。

「わーじゃあ喜んで！ 僕こんな華やかな羽織初めてだ！」

しかし今更やっぱりなしなんて言えるわけがない……！！

くつと夜は涙をこらえた。

しかし目の前では昼が本当に嬉しそうに羽織を着ている。どうやら気に入ってくれたらしいのが慰めだ。

「お前　お古は嫌じゃないのか？　ましてや俺のだぞ？」

その様子に夜は尋ねた。

「そんなことないよ？　僕に自分から進んで自分の着物をくれたのは君と竜二さんだけだ」

意外そうに昼は答えた。そして夜の誤解に気がついて、ああと笑った。

「みんな妖怪の許婚者に自分の着物やるなんて嫌だっけ言うんだ。くれるのは新しいのを作りたくない親だよ。だから自分から着ていいなんて言ってくれるのは嬉しい」

さすがに返答に詰まった。何故なら、昼がそう言われた元凶は自分だ。だから当たり障りのないところで返した。

「その竜二って何者だ？」

「僕の親友のお兄さん。嘘つきで陰険で詐欺師で、もう毎日鍛えられた鍛えられた！」

そいつがいらんことをしてこいつの性格がでかあがったな！？

と夜は恨むべき相手を見つけた。

「陰陽師で、妖怪の仲間になる僕なんて嫌いだって言いながら毎日頭を撫でてくれるの！　自分で自分を嘘つきだと公言しているんだよ」

「ほおー人格に多大な問題がある奴なようだな」

「うん！　間違いなく一般人と妖怪の敵」

だから一般人の敵の僕には優しかったんだよ。

そう笑う昼のこれまでにないあどけない笑顔に胸の奥がきしりと鳴った。

数日後の晴れた青空の下、夜は突然朝の片付けを終わった昼に言った。

「昼！　でえとに行こう！」

すかさず簪が眉間に当てられた。

「何か言った？」

「……一緒に祭りに遊びに行きませんか？」

ちらと音がして簪がしまわれた。

「祭り？　なんでまた」

「お前多分ゆつくり遊んだことないだろ？ たまには息抜きも大事だって」

「まあ 確かに……」

祭りはいつも眺めるだけだった。行ってみたくないと言えば嘘になる。

「じゃあ決定な！ すぐに籠車用意するから、その間に準備しとけよ」

と夜は上機嫌で行ってしまった。

準備と言われても、せいぜい羽織を着るぐらいだ。夜が自由に使つていいと言った柳行李の着物の中から、悩んだ末、赤に黄色い紅葉が描かれた羽織を選び身につける。

表に出ると、夜が籠車の横で太刀を持って待っていた。祢々切丸ではない。それを投げてよこす。

「祭りには色んな奴が来る。護身用に持っとけ」

と笑った。

がたんごとんと牛もいないのに籠車は動き出すと、やがてぎしりと音をたてて空に舞い上がった。

「どこに行くの？」

下を見ながら尋ねると夜は楽しそうに答えた。

「うちのシマの南の方だ。その土地神が今日祭りらしい」

暫く空の散歩を続けると、隴車は降下を始めた。人目につかない山裾に降り、そこから町に入る。

そこはリクオのいた村より格段に大きな町だった。沢山の人が行き交い、町にある大きな神社には出店がびっしりと長い参道を埋め尽くしている。それだけでは足らず、境内の外、町の家側にまで出ていた。

綿菓子に鼈甲飴、焼きイカやうどんまである。ほかにも陶器や骨董品、細工物まで売っている店もある。

「ほらよ、お前の小遣い」

夜は小さな袋を昼に渡した。

「そこら中で食い過ぎるんじゃないぞ」

僕に……小遣い。

秀元さん以外からは初めてだ、と昼は嬉しそうにそれを受け取った。

初めて屈託なく無邪気に受け入れた昼に、やっぱり祭りに憧れていたんだなと夜は来てよかったと思った。

実は昨日の夜、シマの報告がてら側近と話していて、雪女が、

「祭りといえばでえとです」

と言い出して思いついたのだ。ここは以前にも来たことがあるから、きっと喜ぶだろうと思ったのだ。

金魚すくいに挑戦している昼の側に行き、自分も試してみることにした。しかし赤い小さな魚はすばしっこく、簡単には捕まらない。掬う紙は簡単に破れ、二人は残念賞の二匹の金魚をもらって笑いあった。

「夜！ これ食べよ！」

と昼は綿菓子を指差した。

ふわふわのそれは大きくて、見ているだけで甘そうだ。

「俺はいい。お前食べろ」

そう言つと、昼はんーと考え込んだ。

「じゃあ、僕が買って半分こしよう！ 一緒に食べよう？」

ふわふわの雲のようなお菓子を一つ買つと、一口ぱくりと食べて、

「溶ける！」

と驚いていた。

「そりゃあ 綿菓子だからな」

と開いた口に綿菓子をずぼっと埋められた。

「あはは！　おいしいでしょ？」

「　甘い」

顔をしかめながら夜は口の回りを舐めた。顔中に綿菓子がついてぺたぺたする。

「ほら、ここついてる」

昼が手拭いで顔を拭いてくれた。

出店を見ながらふらふらと歩いていると、側の店から声がかかった。

「お兄ちゃん、かわいい彼女だね。一本贈ってあげなよ」

見れば簪を露店に並べて売っている細工師だ。

「彼女じゃない。許婚者だ」

夜は律儀に訂正したが、昼は半眼でそれを聞いていた。

「なら是非贈ってあげなよ。簪を贈るのは愛の証だよ」

どうもこの細工師は昼を完全に女の子の子と思っているらしい。まあ、赤い紅葉の羽織に赤茶色の着物を着ていれば、見間違ふなというのも殺生な話だが、誤解の決め手は夜の発言だろう。

「結婚前には男から簪を贈るものだよ。夫婦の約束に一本どうだい？」

そう言われて、思わず露店を覗き込む夜に昼は思わずつつこんだ。

「おーい、よく考える？」

「うん、これなんかどうだ？」

と夜は自信満々に桜の簪を手を取った。

「いや……僕は君がどの発言に共鳴したのかが謎なんだけど」

「だってお前簪武器に使うだろ？ だったらいいじゃねえか」

「まあ……そうだけど」

まったく、と言いながら仕方ないので自分も一緒に細工物を見ることにした。銀杏や藤、南天に稲穂、朝顔など色んな簪が華やかに並んでいる。それらを見比べながら、昼は一本を手にとると、その切っ先を確かめた。

「うん、これがいい」

とその椿の花のを持ち上げた。先端も鋭いし、握りやすい。

「お前、椿が好きなのか？ 桜の方が似合いそうなのに」

それを見た夜が言うと、細工師が一本の桜色の簪を取り上げた。見

れば、桜の花を大きくしたような薄紅の花がついている。

「兄ちゃん、それも椿だよ。それなら桜みたいだろう?」

それを夜は受け取ると、そつと昼の髪に挿してみた。

「うん　この方がよく似合う」

似合うと言われて、真面目に自分を見つめてくる月の光のような金の目に昼は思わず赤くなつて持っていた椿を落としていた。

「あ、ありがとう」

「オヤジ、これをくれ」

と金を払うと、夜は昼の方を向かいそつと簪に触れた。

「今度から俺を狙う時はそれでやってくれ。もう一本はどこかにしまつて、いつもそれを身につけていてくれ」

それに昼は真つ直ぐ視線を返しなら、

「妖怪つてわからない」

と溜め息をついた。

「自分が殺される得物を選ぶつて自虐趣味?」

「だから俺を変態扱いするなつて!」

二人が金魚を持ちながら、あちこちの店や見世物小屋を覗いてみると、突然悲鳴が聞こえてきた。

何だ、と昼がそちらの方向を見ると、逃げる人々や騒がしい声が聞こえてくる。

「妖怪だ！」

「妖怪が出たぞー！」

叫び声に混じって切れ切れに聞こえてくる。

「おいでなすったか」

にやりと夜は笑うと、祢々切丸を取り出し、喧騒の方へと走り出した。

昼も慌ててついていくと、それは神社の拝殿の前で、賽銭箱を抱えた鬼達が一人の年配の女性を踏みつけている。

「おら！　ここらで無事祭りをしたかったら、俺らに上納金を払いな、土地神さんよう」

「こいつは貰っていくぜ！　たんまり入っていそうだ」

「ま、待って下さい……それをとられたら来年の祭りが……」

蹴られながらも必死で女性は言い募っている。

「そんなん俺らが知るかよ」

「来年は来年で来てやるから、しっかり稼いどけよ」

と三匹の鬼達は声高く笑っている。

「待ちな」

夜が肩に剥き出しの裃々切丸を抱えて鬼達の前に歩み出た。

「お前達か。最近祭りの度にこちらのシマを荒らしてるというのは」

「なんだ？ お前」

鬼がぎろりと見た。

「優男は引っ込んでな！ 怪我するぜ！」

「俺を見て優男と言うのは三下以下だ」

「なんだと！？」

鬼達が色めき立った。

「生憎ここらはうちのシマでね。勝手なことをされては迷惑だ」

と夜は飄々と語った。

「首を置いてくか、今までとった金全て返すかどちらか選べ。後者なら半殺しにするだけで許してやる」

「言わせておけば若造が！ 思い知らせてくれる！」

と鬼達が一斉に襲いかかってきた。

「昼！ 背後は任せたぞ！」

そう言うのと、目の前の鬼に一太刀浴びせた。

「仕方ないなあ」

と答えると、金魚を側の人の手に押し付け、すらりと太刀を抜く。

きらりと光る刃に夜の背後から襲おうとした鬼の血飛沫が飛んだのはその直後だった。

さすがに体がでかい。一太刀では致命傷にならないと、昼は更に胸を突き刀で抉った。

ぐらりと鬼の体が揺れて、背後にそのままずんと倒れた。

夜の方も相手の胴体をかち割り、その巨体を倒れさした。

「後一匹」

と夜が刀を鬼の首にあてた。

「これで最後」

と昼がもう片側に刀をあてると、二人で同時にひいた。

絶叫と大量の血を飛ばし、鬼は息絶えた。

「やっぱり俺の背後を任せられるのはお前だな」

夜はにっと笑った。

「まったく、祭りに連れてってくれるなんて気前がいいと思ったら
こういうこと」

と昼は呆れながら呟いた。

夜は踏みつけられていた土地神のところへ行くと、

「大丈夫か？」

と尋ねて手を差し出した。

「あなた様は奴良組の若頭……ありがとうございます。本当に助かりました」

「なあに、こういう時用にうちが金を納めてもらってるんでね。用心棒は当たり前さ」

と泣き崩れる女性をそつと慰めた。

ふうん……

腕組みして昼はその光景を目にしていた。

利用された感は否めないけど、まあ優しいよね……

と面白くなく呟いた。

観客の一人から預かってもらった金魚を返してもらい、血糊を拭いて太刀を鞘におさめると、戻ってきた夜に言った。

「さあ、用事もすんだことだし、そろそろ帰ろうか」

すると夜は不思議そうに言った。

「何でだ？　これはついでだ。まだ終わっちゃいねえ」

「え？」

そう言うのと、夜はこっちこっちと昼を神社の裏の山に連れて登った。

山と言っても杉や松が植えてあるからそう見えるだけで、実際は丘ぐらいの高さだ。

登りきった時、辺りは薄い闇が降り始めていた。その中を目の前一面に青い海が黒く光り、波立つ海原からは月が周囲を紫色に照らしながら昇ってくる。美しく雄大で荘厳な風景だった。

海風が昼と夜の頬を撫でてすぎた。

「きれいだろう？　昔来て、ここの月の美しさに惹かれたんだ」

と夜は海を見ていた目を昼に向けた。

「だからお前にも見せてやりたかった。お前　多分海も初めてだろっ?」

僕の為?

「……うん」

夜を見つめながら答えた。

波は寄せては返し、金色の月の光を幾度も茶色い砂地に恋い焦がれるように送ってくる。

なんて優しい妖怪。

昼はくすつと笑いたくなった。

僕が欲しかったものの全てを持っているくせに。

もしも、君を僕のものにしたらと昼は心の中で呟いた。

真っ直ぐな君を僕なしではいられない程虜にしたら、僕は一番欲しかったものを手に入れることができるのかな。

それがどんなに歪んだ形でもいい　と昼は夜を見つめ、それは綺麗に微笑んだ。

「ありがとう。本当に嬉しい」

月の光の中、その星の光を集めたかのような冴えたまばゆい笑顔に、夜は初めてこいつに触れてみたいと思った。

暴かれる真実

それから数日後、昼のリクオは風邪をひいて、朝から寝ていた。

朝起きようと思うと体が重い。ふらふらで着替えようとした時、眩暈がしてうずくまってしまい、それに気付いた夜が飛び起きたのだ。

「馬鹿！ 熱があるじゃねえか！？」

熱い昼の体を抱えて、布団に連れて行くと、もう一度横たえた。

「あはは……失敗。やっぱりおとつい紅葉の下でつららと雪合戦したのがまずかったかな？」

「なんでそんな寒いことするんだよ！？」

「だって綺麗だったんだよ？ 紅葉に積もる雪って」

「わざわざ異常気象にして体に異常を起こすな！ 風邪をひかずにすむのは馬鹿だけなんだぞ」

「わー夜が僕のこと褒めてくれたのって初めてだ」

「褒めとらん！ 呆れとるんだ！」

「えー？ だって馬鹿じゃないって言った」

「お前が馬鹿だとそのお前にはめられまくつとる俺はどうなる！？」

「んー馬鹿リクオコンビ」

軽く頭をこづいてやった。

「いたい……病人に暴力ふるうなんて虐待だ」

「俺はお前から毎日殺人未遂にあつとる。どちらが重罪だ」

「え……？ 人道的に虐待でしょ？ 僕のは正当防衛だもの」

「俺の正当防衛権を認めろ！」

「えー妖怪が人間にそんなこと言うのはおかしいって」

昼は布団の中でくすくす笑っていたが、体力を使い果たしたのか、疲れたように口を閉じた。

「ほら、寝てろ。今氷と薬持ってきてやるからな」

「媚薬は嫌だよー」

「だから俺にも良識はあるって！ 病人を襲う趣味はない！」

「んー熱で頬が上気して色っばくなるってきくのかなあ」

「……頼む。俺に良識とつきあわせてくれ」

「はいはい」

昼は笑って答えると、すうつと目を閉じた。かなり体が重い。だい

ぶ熱が出たのだろう。

少しやりすぎたかな……

おとついの雪合戦を思い出した。

でもあれぐらいしないと寝込めそうになかったし……

思った通り、夜は自分を心配してくれた。

これで今の夜の気持ちが推し量れる……

そう思いながら、昼は闇の中に吸い込まれるように意識を飛ばした。

目が覚めた時、頭の上には巨大な氷の袋がのっており、体の横で夜が汗を拭いた手拭いを桶で洗っていた。

「ん？ 起きたのか？」

夜は手拭いを絞って桶にかけると、昼の顔を覗き込んだ。

そして氷をよけて、そつと額に手をやる。

「まだ熱があるようだな。今日は一日ゆっくり寝てろ」

「ずっと……ついててくれたの？」

昼はその金の瞳に尋ねた。

「ああ。今日は特に用事もねえしな。おかゆをお袋が作ってくれたが、食べれるか？」

暖かな湯気がまだ微かに残る器を差し出された。

「うん……食べる」

と昼は夜に支えられながら身を起こした。まだふらつく体を支えるため、夜は昼の背中に枕や座布団をあてて後ろに倒れないようにしてくれた。

「ありがとう」

「いいって。それにお前に礼を言われるなら毎日でも悪くねえなあ」と夜は優しく微笑んだ。

おかゆはのりと卵と鮭の身をほぐしたものが入っていた。

だいぶ冷めてはいたが、やけどをしないようゆっくりと一口ずつ食べる。

「お袋から人間用の風邪薬もらってきた。食べ終わったら飲めよ」と側に置いた。そして席をたとうとする。

やっぱり……こんなものかな？

簪で期待したけれど、あれはささいな独占欲かもしれない。

「暖かいお茶にかえてくる。すっかり冷めちまった」

そう言うと、夜は急須を持って出て行き、すぐに暖かいお茶と共に戻ってきた。

戻ってきてくれた……

でもまたすぐに部下と交代してしまうかもしれないと俯く。

「なんだ？ もういらねえのか？」

いつもは残さず食べる昼が箸を置いたのを見て、夜は心配そうに尋ねた。

「うん やっぱあんまり食欲がない」

「仕方がないなあ。じゃあもう薬飲んで寝ろ。寝つくまで側についてやるから」

その言葉に昼は夜を振り返った。

「君がいてくれるの？」

「あ……ああ。でも俺以外の方が安心するんだったら……」

「うつん」

と昼は首を振った。

「君がいい。君は僕に嘘の笑顔を見せない。……一番安心する」

「そうか？」

と夜は嬉しそうに昼の背中をぽんぽんと叩いて抱きしめた。それは幼子をあやすような仕草だった。

「俺はお前の側はいつもドキドキする。まあ毎日殺されかけてるしな。でも俺にそんな風に体当たりしてくる奴はいなかったから、なんだか気持ちがいい」

初めて抱きしめていることに気がつかない程自然に昼は笑うと、ゆっくりと布団に横になった。

「お願い。眠るまでだけ、着物の裾を握らせていて」

昼はそつと指先で掴んだ夜の着物を持ちながら、茶水晶の瞳で訴えた。

「ああ、いいぜ」

本当は手を繋いでやりたいと思いながら、夜は返事をした。

遠慮するように持たれた着物の端、それでもそれは自分がいることを確認するためのもので

言い知れぬ愛しさが夜の中でこみあげてきた。

こいつは強がっているけれど、俺を必要としてくれる。

三代目でもなく、妖怪でもなく、ただの奴良リクオとして。それは初めての感慨だった。

こいつは僕に好意を持ち始めている……

昼は目を薄く開けて、掴んだ着物を見ながらそう思った。

だとしたら、そんなにことは難しくない……

病気の間、夜は布団を別にした方がいいのではないかと昼は言ったが、

「妖怪にはうつらねえだろ」

と夜は熱にうなされる昼の背中をさすりながら少しでも楽に寝れるように側に横たわっていてくれた。

外は日ごとに寒さを増していくが、布団の中は伝わる人肌の体温で暖かく、それに体を温められて昼はひどい風邪だったにもかかわらず、急速によくなっていた。

すっかり体も本調子に戻り、いつもの生活に戻ったが、改めて人間の体は脆いと実感した本家の妖怪達が心配するので、今日も早くに寝間に追いやられていた。

勿論、本家の妖怪の下心はそれだけではない。少しでも若と二人きりで過ごす時間を増やして、いい雰囲気になってもらおうという魂胆だ。

若がつききりで看病して以来、どこか二人に親密な感じが漂うことがあつた。

そんな訳で、先に寢間に来て、することもないので布団に入つてころころしていた昼だったが、やがて遠くの方で大勢のざわめきが聞こえ去つていった。

それから暫くして、夜が疲れた顔で寢間に入つてくると、ごろりと布団に横たわつた。

「なんか疲れているね？」

と昼は尋ねた。

「幹部会だ。俺の三代目襲名でまたもめた」

と夜は目を閉じたまま呟いた。

「誰か反対しているの？」

と横たわつたまま、顔だけ上から見つめるようにして尋ねた。

「色々いるが、まあ急先鋒は一つ目だな」

「一つ目？」

「じじいの方からの古参の幹部で、ちょっと調子に乗りやすいが女子供には優しい男気に溢れる奴なんだがー人間の血をひく俺を三代目にするのは嫌らしい」

「人間が嫌いなのか？」

「いや……そうでもねえんだが。お袋とは特に仲悪くないし、そうは言っても異類婚は珍しいからな。人間の母親をもつ俺は不安といったところだろう」

「許婚者の決まりがあるのに？」

「あれは一部の大妖怪だけだからな。二代続けて異類婚になったのは珍しいらしい」

「ふうん」

と昼は夜を覗き込んで、にこりと笑った。

「ねえ、面白い話してあげようか？」

ん？ と夜がその閉じていた瞼を開けた。するとすぐ近くで茶水晶の瞳が優しく微笑んでいる。

「明日が借金の返済日という夫婦がいました。でも家にはどこを探しても返せるお金なんてありません。借金取りは明日返さずにすめば、次は二月後まで来ません。さて夫婦はどうしたでしょう？」

「二人で一日夜逃げしたとか？」

と夜はその瞳を見つめながら尋ねた。

「残念！ 答えは朝から大喧嘩！ 茶碗は投げる布団は投げる、箒

を持って叩いて追いかける。あまりのことに借金取りは金を返せと口を挟む暇もない。とうとう夕方になって、借金取りは諦めて帰ってしまいましたとさ」

「あはは！　なんだ、そりゃあ！？」

「ね？　どうしようもない状況に見えても、案外意外な解決法が転がっているものだよ」

だからあんまり心配しないで。

と昼が優しく笑うのにつられて夜も笑んだ。

「そうだな　纏まる時は意外とあっさり纏まるかもな」

「そうだよ。人間の僕も協力して、人間への偏見をなくすよ」

「昼……」

俺の為にと言ってくれるのが嬉しい。

「ほら、元気を出して」

と昼は夜の頭を抱え込んで、何度も優しくその銀色の髪を梳いてやった。

「君の髪って、まるで薄みだいた。銀色に光ってすごく綺麗……」

「昼」

と夜は胸に埋めた顔を持ち上げた。

すごく、触れなくなった。こうして抱き締められているのは足りない
もっと深く触れてみたい。

でも昼はにこりと笑んだ。

「君ってなんだか弟みたいだ」

夜の眼差しが焦がれるものに変わったのは気がついた。

でも許してやらない。

体を許すのは最後の交換条件を飲ますのと引き換えでないと意味がない……

その昼の発言に夜はかなりショックを受けたようだった。

弟……

「……なあ、なんで俺が弟？ 外見からしてもせめて兄だろうが」

本当は……きつと兄弟なんて嫌だけれど……

「え？ だってこんな手のかかりそうで、すぐ僕にひっかかる兄なんて嫌じゃない。でも弟ならそこがかわいいかも！」

「かわいいって……毎日苛める気だ」

「嫌だなあ、可愛がるんだよ」

悩みを言つて軽口を言いあつて……そんななんでもないことが、君は誰とでもできるわけではない。

その心地よさをゆつくり骨の中までしみこませるといい、と昼は優しく笑つた。

数日後、よく晴れた朝、昼は夜に尋ねた。

「夜、今日何か用事ある？」

「いや　ないぜ？」

と今日の予定を思い出しながら、夜は答えた。すると昼はにっこりと笑つた。

「じゃあ今日は僕に付き合つてよ。一緒に茸狩りに行こう」

「は……？　茸？」

と夜は唐突な言葉に驚いた。

「ほら、この間お祭りに連れて行つてくれたじゃない。あれのお礼。風邪ひいたりですっかり遅くなつたけど、今なら松茸が出る頃だし、ちょうどいいでしょ？」

「お礼？」

「うん！　だつて僕ほかに思いつかないんだもん。茸ならよく知ってるから教えてあげれるよ」

多分、君茸狩りしたことないでしょ？　という言葉に夜はこくと頷いていた。

「それつてでえと……」

「何か言つた？」

とびつと椿の簪が首もとに飛んできた。

「いえ……何でもありません」

「じゃあ籠とか用意してくるね」

と昼は爽やかに笑って行ってしまった。

俺の簪、身につけてくれているんだ。

ひどく嬉しくて顔が綻んだ。

すると本家の妖怪達がわらわらと集まってきた。

「若！　これはチャンスですぞ！」

「これはやっぱりでえですよ！　誘われたんですよ！？　あの昼様から！」

昼が来てから一月たち、若当てで早い時期にかけていた妖怪達は敗

者復活戦とばかりに新たに賭け直していた。

「今日こそ射止めるチャンスです」

「場所は人気のない山の中、そこで二人つきり。何もしないでは男がすたります！」

「告白です！」

「いや、いきなり口づけるのも印象づけれますぞ！」

「いつそ押し倒して……」

「毒茸を口の中に入れられると」

と夜が呟くと、全員がはっとした。

そうだった……！ 昼様は天下無敵のかかあ天下！

それを相手に武器のある土地でことに及ぶはあまりに無謀すぎる……！

「若」

と鴉天狗が言った。

「どうぞご無事でお戻りを」

「御武運を陰ながらお祈り申し上げます」

「死んではなりませぬ……死んではなりませぬぞ！」

「うるせえ！ 死地に赴くみたいないな挨拶するんじゃない！」

と夜は怒鳴り散らした。

籠車で黒羽丸から教えてもらった茸のよく出る山に行くと、昼は落ち葉をがさがさと踏みながら歩いていった。

「もう少し行くと赤松の林があるそうだよ。そこはよく手入れされていて、松茸がよく出ると評判なんだって」

と昼は楽しそうに籠を持ちながら言った。

「君も松茸や椎茸やしめじは知っているでしょ？」

「ああ。その辺なら食べたことがある」

「松茸には真つ白なシロマツタケモドキってのもあってね。これも食べれるんだよ」

「ふうん」

と夜は頷きながら昼の後をついていった。

雑木林の中を歩き、倒れていた木を乗り越えたところで、ふと地上に生えている茸に気がついた。

ふわりと丸い笠に太い柄の真つ白な茸が生えている。

「お、これお前が今言っていた奴じゃねえか？ 白いが松茸そっくりだぞ」

と手を伸ばそうとした。

「触るな！」

と恐ろしい勢いで手を掴まれた。

振り返ると昼が睨みつけるような真剣な形相でこちらを見ている。

「触らなかった？」

「あ、ああ……」

と夜は頷いた。

ほつと昼は手を離れた。

「それはそっくりだけど猛毒のドクツルタケだよ。食べたら死ぬよ」

「え！？」

と夜は驚いた。その夜の表情を見て、ようやく昼はいつもの笑顔を思い出した。

「あ、でも妖怪ならわからないかもー」

と笑う。

「試しに食べてみる?」

「俺で人体実験する計画はやめてください」

いきなり毒茸を当ててしまった……

夜はうーんと考え込んだ。

やはりここは汚名返上をしたい。

初心者なのにそんな見栄が働いたのは、やはり昼のリクオの前だからというのが大きかったろう。

歩きながらきよきよと周りを見回し、木に生えている茸を見つける。

これは見たことがある! とぱあつと顔が輝いた。

「昼! 見つけたぞ! あそこの木に生えているやつ、あれ椎茸だろっ!」?

と夜はいそいそと話しかけた。

「あれはツキヨタケ。よく似てるけれどあれも毒茸」

ずうんと夜は落ち込んだ。

「すごいねー毒茸をこれだけ短時間で二連チャンとは。ある意味天

才」

「からかってるのか!？」

「いや、今度は君とぜひ毒茸狩りに行きたい。殺傷能力の高そうなのがどんどん採れそうだ」

「それ誰に使う気だ!？」

「君と君と君と君と君と　それと君。全部で六人」

「一人だろうが!　限定してるだろうが!？」

「え?　だって心中の一人用片道切符頼まれた時用に」

「頼まん!　心中するならお前とする!」

「へえー」

と昼は笑った。

「僕としたいんだ?」

え!?

と夜は口を押さえた。

今何言った?　俺?

しかし昼はにこにここと笑って、

「さあ、行こう！」

と夜と手を繋いだ。

二人で手を繋いで山道を歩くのは楽しかった。

手を繋いで登り、小さな沢を渡った。夜がそつと昼に手を差し出して、濡れないように石を渡らせてくれた。

少し歩いたところで、広葉樹林の湿った落ち葉に足をとられた昼を助けようとして、夜が咄嗟にかばった。

すると、その手にまた茸を一本掴んでいた。

また、茸……！

と夜は怖々昼にそれを見せた。

「あのう……こんなの見つけたんだけど……」

ふうと昼は溜め息をついた。

「まったく君はどうしてそう変わった茸を引き当てるかな？」

「また毒茸！？」

「それはバカマツタケっていうんだよ」

「バカ！？ やっぱり毒！？」

三連続！？

夜が打ちのめされようとした時、昼が言った。

「「さまつ」と呼ぶところもある。松茸より香りが強くてとても美味な珍重される茸だよ」

「え！」

と夜は驚いた。

「だってバカマツタケって」

「うん。味や評価の割にかわいそうな名前なんだよね。本当はもう終わってる時期なのに」

いいのが採れたね、と昼は笑った。

なんだか嬉しくて夜も笑った。

「今夜、これ一緒に食べようぜ」

「そうだね。僕もそれはあんまり食べたことないや」

と二人は笑いあい、そのままその倒木に座って休憩することにした。

そして山の斜面の蔓草になっていた赤い草の実を採って二人で食べた。

それは赤い透明な細かな実が幾つか寄せ合って小指の半分ほどの丸い実をつけており、口の中に入れると甘酸っぱさが広がる。

「おいしいでしょ？」

と昼は笑った。

「うん」

と夜はその笑顔を見ながら答えた。

「昼、こい」

とほっぺを指差す。

「赤い実がついている」

「本当？ とって」

と昼は顔を夜の方にむけた。

その赤い実に誘われるように、夜は唇でそれをはさみとった。

甘酸っぱさが体中に広がって眩暈がするようだった。

すごく危険だとわかっているのに……まるで麻薬のように甘く

て蠱惑的でやめられない。こいつに中毒になりそうだ……

と昼の笑顔を見ながら、夜は思った。

そろそろ行こうかと話している時、突然頭上から黒羽丸の声が響いてきた。

「若！ 昼様！ どちらにおられますか！？」

見上げると、優秀な側近が山の上を飛び回って二人を探している。

「おう、ここだ！」

と夜は手をあげて振った。

それを目ざとく見つけて黒羽丸が降りてくる。

「どうした？ いつも冷静なお前がそんなに慌てて」

と夜は腕組みしながら尋ねた。

「お二人ともすぐに屋敷にお戻りを。大変な方がおみえです」

と黒羽丸は片足をつきながら言った。

そして連れてきていた籠車に二人を乗せると、すぐに本家にむかった。

屋敷につき、玄関についた籠車を降りる。

屋敷からは小妖怪から側近までが、若の姿を見つけて安堵したようにわらわらと飛び出してきた。

「若！ お帰りなさいませ。実は大変なお客人が」

というつららの言葉を遮って、庭の紅葉の上から声がした。

「やれやれ待ちくたびれたのお」

その声に二人が紅葉の木に目をやると、闇色の打掛を纏った長い黒髪の女性が、紅葉の上から二人を見下ろしている。

「久しいの、ぬらりひよんの孫。わらわが妖力の回復の為眠っていた間にむさくるしい男になったのお」

「羽衣狐！」

と夜は叫んだ。

何故京都を統べる大妖怪がここにいる！？

祢々切丸に手をかけた。それに羽衣狐はくすりと笑った。

「今日は争いに来たのではない。それをしまえ」

と軽々と紅葉の木から飛び降りた。打掛が闇色に二人の目の前に広がる。

地上に降りると、羽衣狐はじつと夜の傍らの昼を見つめた。

「それがお前の許婚者か？」

咄嗟に夜は昼を体で隠した。

「そうだ。それがどうかしたか？」

「お主、男色を好むのか？」

「違う！ これはじじいが女と勘違いして名前を贈って」

その言葉に羽衣狐はにやりと笑った。

「やはりな」

と赤い唇が艶やかに動いた。

「わらわは生まれた赤子が男と聞いて名を贈った。ところが娶ってみれば、来たのは娘じゃ」

「？ ？ ？ どういうことだ？」

と夜は闇色の女性に尋ねた。

「わらわ達が贈った名を秀元が取り替えたのじゃ。わらわの妖力をこれ以上増やさぬ為にな。あの陰陽師、女同士では交われぬとわかつていてあこぎな真似をする」

だからと闇色の妖怪は昼をすっと指差した。

「それがわらわが名前を贈った子供じゃ。わらわの許婚者
返してもらおう」

謎かけ

闇色の打掛から二人の前に伸びた白い手に、昼と夜は互いに言葉もなく立っていた。

何？ なん……だって？

昼は頭が割れるように打つのを感じた。

自分達は許婚者ではなかった！

そのつきつけられた事実が、ひどく衝撃だった。

しかしほんの一拍で、立ち直ったのは意外にも夜の方であった。

「断る！ こいつは俺が許婚者と認めた！ 男が一度娶った相手の人違いでしたと簡単に渡せるか！」

と昼と羽衣狐の間に立ちふさがった。

「ふむ」

と羽衣狐は腕を組み、夜と昼を見つめた。

「しかしお主まだ所有の烙印は押しておらぬのだろうか？ 頬や唇には軽く触れたようだが、そやつの体からはお前の匂いがせぬ」

「所有の烙印？」

「そんなことも知らんのか。うぶな男など面倒なものじゃな」

「黙れ、この男嫌い！」

「自分の許婚者が行く先々や内緒でほかの妖怪に差し出されて交渉ごとに使われては嫌じゃろう。だから名前を贈った時に触れた相手の妖気が残るようにしてあるのだ。一度抱けば終生そやつの匂いは消えぬ。その妖怪以外には能力を発動できなくなる。まあ、許婚者の操を護るための処置じゃな」

ぐつと夜は言葉につまった。

つまり、俺達の間はまだ何も無いこともお見通しというわけか

……

「秀元め。一月あればお前が手を出し、わらわがじたんだ踏むしかないと思っただろうが、お前が存外へたれでよかった」

「おい」

思わず夜は笑っている黒衣の女性に言った。

「勿論ただ渡せとは言わん。お前の本来の許婚者を返そう」

振り向き玄関にいた京妖怪に目配せすると、彼らの間から横の黒髪を両側で結わえた一人の娘が前に出された。

「苔！」

娘は妖怪の中から走って昼に飛びついた。

「リクオ、リクオー！ 会いたかった！ 会いたかったの！」

その姿を抱きしめ、昼ははっと目を開いていた。

何をしているんだ、僕は……苔のことを忘れて！

あまりに楽しい日々だったから、村のことを思い出す間もなく、一番大切な筈の彼女まで忘れていた。

ぎりつと昼は唇を噛んだ。

「そうか……お前が『狐毛』なんて頭を疑うような名前を贈った張本人なんだな」

きつと昼は羽衣狐を見つめた。

「お前のせいで苔がどれだけ苦労したと思っているんだ。苔がこけたーとか、おこげを食べた苔とか、頬がこけたとか散々からかわれてきたんだぞ」

「それ苔がこけた以外全部言っただのリクオ！」

と苔は怒りながら叫んだ。

「とにかく！ そんな悪趣味な妖怪のところに僕は行く気はないね」

苔の言葉は聞き流してリクオは笑いながら言った。

「わらわが悪趣味とは……ひとえに高尚な好みは時に一般の理解を得にくいだけじゃ」

面白そうに羽衣狐は口答えした子供に笑った。

「わらわとて普段の遊びなら、むさい男を相手にするよりまるやかな肌に柔らかな唇のおなごの方がよい。あんな筋肉と骨ばかりの生き物、抱いていて何が楽しい」

「お前は真正の変態か!？」

思わず夜は叫んでいた。

「夜、これは変態じゃない」

にこりと昼が笑った。

「正真正銘の変質者だよ」

うわあ！

周りで見ていた妖怪達が思わず心の中で叫んだ。

「さすが昼様……大妖怪相手でも堂々の変質者扱い……」

「みんなが言い出せないことを恐れもなく……」

と本家の妖怪達は唸った。

しかし羽衣狐はきよとした顔をしていた。

「お前はおなごより男の方がいいのか？　その変人の孫はともかく、男としてそれはどうかと思うぞ」

「異性という考えを基本から抜いているな。それこそどうだと思っぞ」

それに羽衣狐はくすくすと笑った。

「気に入った！　お前は頭の回転も早いし度胸もいい。何よりまるでおなごのような顔立ちじゃ。胸の發育してないちよつとわらわを楽しませるものがついているだけのおなごと思えば愛嬌じゃ。成長しない呪いをかけて、情人として終生その姿でめでてやろっ」

「だからこいつは渡さねえ！」

と夜が再び二人の間に入った。手には祢々切丸を抜いている。

「生憎取り替えればすむというもんじゃねえ。俺はこいつに決めた俺の許婚者はこいつ以外にありえねえ」

「ふむ、困ったのう」

にたりと羽衣狐が笑った。

「やるか？　ぬらりひよんの孫」

空気が一瞬で闇色に変わるほどの妖気が溢れ出た。

冴え冴えとした銀色の刀を構える夜の後ろで、昼が「待った！」

と叫んだ。

その声に一瞬強ばっていた周りの妖怪達も体の力を抜いた。

いくら若でも相手が悪い……

生死をかけた戦いになるのは目に見えている。だから昼の言葉に救いを感じた。

昼は手を止めた二人ににこりと笑った。

「要は僕がどちらの変質者に娶られるかでしょ？ それなら僕に決めさせてよ」

「ほう わらわが納得する方法があるというのか？」

「古来から求婚者が重なった場合は難問をとくって決まっているじゃない。だから 僕が一番欲しいもの、これを当てて僕にくれた方に僕をあげるよ」

「かぐや姫か」

羽衣狐は楽しげに笑った。

「期限は明日から三日、一日にできる回答は三つまで。僕は当たった方に でも二人とも当たらなかったら僕を諦めて」

「面白い。それにのった」

と狐は笑った。

「夜もいいね？」

ぐいと祢々切丸を下げさせながらきく昼に、

「わかった」

と夜も仕方なく返した。

「では明日。勝負がつくまでに手を出すなよ」

と言いおいて羽衣狐は帰っていった。

「出せば奴良組三代目はへたれと言ひ触らしてやるわ」

明らかに脅迫だった。

この場合出さないのもへたれでは？

とみんな思ったが、確かに出すのも卑怯者扱いされるだろう。

とにかく、夜は昼を振り返った。

そこでは、再会に泣いている少女を優しく慰めている昼の穏やかな笑顔があった。

「リクオ……リクオ。また会えてよかった。怖かった、すごく怖かったの」

「苔……」

そつと昼は抱きしめた。

そうか……この少女が簪の……

ふと夜はなんとなくわかってしまった。昼の目が簪を見つめている時と同じように愛しげに細められていたからだ。

その途端、この少女に言い知れない黒い感情が湧き起こった。

「昼」

後ろから夜は苔を見つめる昼に冷たく声をかけた。

「その娘　しばらく預かることになるのか？」

と尋ねた。

「そうだね……本来君の許婚者だと言われればね……」

昼は困ったように答えた。

「わらわの許婚者……」

その言葉に苔は昼から顔をあげ、夜を見た。凜々しい顔立ちの美しい妖怪に、苔は僅かに頬を染めたが、ひどく冷ややかに見つめられてびくりと昼の陰に隠れた。

「大丈夫、変質者だけとって食いはしないよー」

「おい！ 俺を狐と同類扱いするな！」

笑う昼に夜は叫んだ。

「取り敢えず、苔は一つ目に預けたらどうか？ 異類婚を嫌っているから、苔に変な真似をしないだろうし、女子供には優しいんでしょ？」

その夜に昼は提案した。

「人間を理解してもらえるしね」

「一つ目 そうだな」

そうしたら昼とこの少女を引きはなせる……

と夜は頷いた。

「じゃあ決まりだね」

笑いながら、昼は心の中で自分に唾を吐いていた。

何をしているんだ……僕は。

夜ならきつと彼女を大切に幸せにしてくれるだろう。それなのに異類婚に理解のない一つ目に預けようとしている。

彼の人間への理解を深める為？ そんなの表の言い訳だ。

きつと……彼なら苔を夜に近づけない。それは気づきたくない眩きだった。

その日奴良組は大騒動になった。

「若の許婚者が若の許婚者でなかった!？」

「昼様は羽衣狐の!？」

「まずい! それはあまりにまずいぞ!」

噂は本家中を駆け巡り、三十分後には本家の中で知らぬ者はいなくなった。

「しかも昼様は羽衣狐を変質者呼ばわり!」

「それは天晴れ! さすが昼様!」

「みんな思えど口に出せなんだことを……よくぞ仰った!」

「しかしその変質者に初恋の君を奪われるかもしれない若の心境を考えると……」

「男として泣けてきますなあ」

と本家の妖怪達はみんなして肩を落とした。

いや！ 今こそ一致団結して、若の為に尽くす時！

そう先ず雪女が立った。

夕ご飯をよそいながら、昼にさりげなく尋ねる。

「そういえば 昼様はどんなものが一番好きなんですか？」

「うん？ 食べ物？」

「はい！ なんでもおっしゃってください。お作りします！」

と満面の笑顔で笑った。

「つらが作るものは何でもおいしいよ！ できたらずっと食べていたいな」

「昼様……私もずっとお作りしたいです！」

行け！ 訊け、そこだ！

本家のみんなが握り拳を作った。

「じゃあお代わりもう一杯もらってもいい？ もう三杯目だけおいしいくておいしくて！」

「はい！ 喜んで！」

ずっと食べたいが違うだろう！？

全員が口に出さずに突っ込んだ。

二番手は毛倡妓だった。

「昼様が来られて一月、本家で記念に祝賀会を開きたいのですが、何か欲しい物とがあります？」

「欲しい物？」

「はい！ 記念に若から贈ってもらおうと思ひまして」

「そうだねえ」

と昼は考え込んだ。

「もうじき冬だから半纏！ あれ暖かいんだ！」

「昼様 もつと高いものでも大丈夫ですわよ？ 半纏は首無が手作りしてくれます」

「僕、毛倡妓からのが欲しいな。だって毛倡妓ってすごい美人のお姉さんみたいなもの。お姉さんの手作りって憧れていたんだ！」

「昼様……」

ぎゅっと毛倡妓は抱きしめた。

「私裁縫は得意ではありませんが、首無に教えてもらって頑張ります！ だからお姉さんって甘えていいんですよ」

「本当！？　すごく嬉しい！」

一番男慣れしている奴が誑されてどうする！？

と物陰の妖怪はみんなでつつこんだ。

一人首無はぶつぶつ言いながら、のの字を書いていたが、慰める者は誰もいなかった。

本家妖怪達の腹の探り合いから解放されて、寝間に入った昼を迎えた夜は少なからず驚いているようだった。

「お前　いいのか？」

「何が？」

と返す。

「俺はお前の許婚者じゃなかったんだぞ。だからもう無理に同衾しなくてもいい　側近達に言って部屋を変えさせてもいいんだぞ」

「何を今更」

昼はすぼりと布団に入った。

「こんな冷える夜に独り寝しろなんて殺生だ」

そう珍しく体を寄せてくる昼に夜は慌てた。

「だってお前　烙印のこと聞いただろう。俺が無理矢理刻んだらどうする？」

「刻みたいの？」

と上目づかいで見上げた。

何も言わない夜の金の瞳が恐ろしいほど真剣だった。

刻んでもらおうか？　そうすれば狐のものにはならずすむ……

優しい君は一度情をかわした僕の側で苔を並べて扱うことはしないだろう。

君は苔に触れることができなくなる……

だがそれはずっとずっと欲しかったものを諦めることになるかもしれない。

僕は君の情人となり、一生そこから抜け出せないかもしれない。

情にあつい夜のことだ、抱いて終わりとはいかないだろうが、不動の恋人の位置を与えられがんじがらめになるだろう。

だって君には理不尽な願いだから。

それでもその胸にすがりつくのを止められない。

「俺は無理強いはしないと約束した」

ああ……そうだね。

と昼は小さく笑った。

なんて真っ直ぐで優しい妖怪。

そんな君を嵌めてまで手に入れようとしている自分の望みの醜悪さと言ったら。

たまらず夜の胸に顔を埋めた。

それだけでいいんだ……そしたら後はもう何も求めないから。

体がズタズタになっても、自尊心を踏みにじられることが起きて、きつと堪えていけるから。

翌日羽衣狐は大きな荷物を部下に持たせ、奴良組の本家にやってきた。

既に用意を調えていた妖怪達は、羽衣狐を襖を外して三間ぶち抜きの床の間に通した。その上座に昼が掛け軸を背に座り、その前にむかって右に羽衣狐と京妖怪が、左側に夜と総大将、若菜、そして側近達が座る。本家の妖怪はそれより後ろに詰めて、ことの成り行きを見守っていた。

「ふむ。どうやら約束通り手を出しておらぬようじゃな」

と羽衣狐は昼を見て言った。

「まあ一月何もできなんだへたれが今更愛でようもわかるまいが」

「変質者が何をえらそうに！」

と夜は叫んだ。

「わらわは変質者ではない。男などにおなごを愛でる高貴な趣味がわかるとは思っておらぬわ」

「いや、私にもわかりませんけどね……」

ぼそりと毛倡妓が呟いた。

「わかりたくありません」

さらりと若菜が言った。

「息子！ あんな変態に大事な妹の子を渡すんじゃありませんよ」

横から叱咤した若菜の見えない黒い圧力に、初めて夜は母と昼との血縁関係を確認した。

「じゃあ、始めようか」

上座で昼が若菜の手作りの柔らかな紅葉色の着物を着て、にこりと笑んだ。

「僕が一番欲しいものわかった？」

それに羽衣狐は大きなつつみを持ってこさせると、指で合図をして開かせた。

「人間が先ず欲するものといえば財産じゃろう。大判小判はもちろんのこと、南海の真珠に珊瑚、翡翠に紫水晶、瑪瑙、舶来の硝子から京友禅までありとあらゆる財物を集めさせたぞ」

手下の京妖怪がつつみを開けると、それが山と積まれ、燦然と目に眩しい輝きを放っている。真珠は白真珠から金、桃色まで揃い、紫水晶に黄水晶、赤、黒様々な瑪瑙が夥しく積まれている。更に金と銀が光を放って輝いていた。

思わず奴良組の妖怪達からおおつと感嘆の声があがった。

関東一を誇る奴良組でも、これほどの財力はない。

しかしにこりと昼は笑った。

「僕がその程度のものを自分で稼げないと考えてると思う？」

その程度！ 言い切った！

ごくりと本家妖怪が唾を飲んだ。

「僕の一生と引換だよ。安くみないでほしいなあ」

「あれで安い……」

「昼様の欲しいものって一体……」

青田坊と雪女がごくりと呟いた。

「じゃあ夜は？」

と昼は尋ねた。

こいつが一番欲しいもの。

昨日からずっと必死で考えた。

何ももっていないこいつは何が一番欲しいのだろう？

そして考えた答えの一つを口にのせた。

「自分を一番愛してくれる人」

一瞬ぴくりと昼の指が動いた。

そして静かに睫が伏せられる。透き通る茶水晶の瞳が優しくかける。

「それは　とっても魅力的だなあ」

でも不正解なんだと昼は淋しそうに笑った。

「じゃあ二回目だね」

と昼は羽衣狐の方を見つめた。

つつみを片付けさせた羽衣狐は片膝をたてて、面白そうに昼を見ていた。

「財でないとすると、地位や権力か？　わらわにかかればどんな権力者であろうと所詮駒じゃ。望むだけの地位をくれてやろう。大臣でも関白でも將軍でも好きなのを選べ」

「ふうん。天皇は無理なの？」

「それが望みなら上皇を操って、そなたを帝にしてやろう。国を動かすも混乱に導くも思いのままじゃ」

「興味ないね、政治なんて」

「大人になれば変わるぞ？　人間の権力に対する業は深い」

「今欲しいもの！　もう少し若者視点で考えてよ。あ、ご老体には無理か」

「誰が老体じゃ！　わらわの姿はお前と数歳しか変わらぬ！」

「現実には千歳以上違うくせに　若作り」

「年より幼く見えるお前に言われたくないわ！」

「は、羽衣狐様……」

と後ろから鬼道丸が声をかけた。

はつと気がつき、こほんと居住まいを正す仕草はうら若き乙女のようだった。

「うんうん、そうやって猫かぶってればばれないって。でも狐が猫かぶるなんて毛皮が小さすぎて無理だよー」

怖い、昼様が怖すぎる……

大妖怪相手になんておそれ知らずな、とみんなが息をひそめて見ていた。

「じゃあ夜は？」

と昼が振り返った。

「家」

と夜は昼を見つめた。

「暖かくてお前をいつでも休ませてくれる、住み心地のいい屋敷。誰かに気兼ねして働くこともなく友達も呼んで遊べるようなお前だけの陽当たりのいい風通しが爽やかな家」

暫く昼は黙っていた。

「僕だけの家か……」

昼はそっと尋ね返した。

「もしそれが望みだったら、君は僕だけの屋敷をくれるの？」

「おう！」

と夜は答えた。

「夏は海が見えて、秋は紅葉が楽しめる場所に建てる。庭には桜を植えて春には花見ができる。俺と一緒に酒を飲もう。そして二人だけの時間をすごそう」

くすりと昼が笑った。

「それは　お妾だよ、夜」

ひどく淋しい笑いだった。

「じゃあ今日の最後」

と昼が言った。

「ではそちらの女性の変質者さんから」

「その呼び方よせ！」

と思わず羽衣狐は叫んでいた。

「財物でも権力でもなく、年頃の男が求めるものといえば、美女であろう？　幸いわらは絶世の美貌、天下の美女と称される。そのわらわが男のそなたの恋人になってやろう」

長い艶やかな黒髪に手を滑らせながら羽衣狐は答えた。

「生憎と年増に興味はない」

「誰が年増じゃ！？ わらわは若く美しい！」

「若作りの老婆のくせに 図々しいにもほどがある」

「貴様わらわの年上の魅力がわからんのか！？ たかが千年ぐらいで老婆扱いするな！」

「僕から見れば充分ご隠居様、というかもう御先祖生きた化石のレベルだよ」

「誰が特別天然記念物だ！」

「なんで自分をそう良い方に言えるんだろう。進化し損ねた絶滅危惧種が」

「わらわは一人、孤高の存在じゃから貴いのじゃ！」

「つつか絶滅してくれ。世の為人の為僕の為、三者にお得で世界に優しい」

「人を廃棄物みたいに言うな！ 年上は敬えいたわれ！」

にこりと昼は笑った。

「そうだね。敬いいたわる御老人だったね」

「うわあ……」

とつららが思わずひきつっている側で、若菜が膝を打った。

「よく言った！ さすがあの子の息子！」

どんな妹さんだったんです！？

みんなが声にならない疑問を叫んだ。

「とにかくそんな条件じゃ折角の美女も却下。単に僕が君のものになるだけじゃない」

と昼はぷいと横をむいた。

「で、そちらの男の変質者さんは答えは？」

「おい！ 頼むからあの女好きと同列にするな。なんか物悲しくなる」

「適度な悲観は自分を見つめ直すいい機会だよ」

「いや 前向きに人生送りたいんだが……」

君ならそうかもねとくつりと昼は笑った。

「確かに同性に恋をしたという点では否定できませんなあ……」

「でも本気の恋だからましなのでは？ 相手は単なる遊び相手をで

すぞ」

「そこ！ 本家妖怪ども！ こそこそ同意してるな！」

夜が後ろにむかつて叫んだ。

「まったく……」

前をむく孫を見ながら総大将は呟いた。

「恋に否定はせんのかな？」

「この期に及んでそんな自覚もないようでは私は我が子の鈍感ぶりに不安を覚えます」

と優しく若菜は微笑んだ。

前にむかつて夜は座り直すと、じつと微かに笑みを刻んでいる昼を見つめた。そして口を開いた。

「親友」

ろくに何ももっていない環境で手にした数少ないかけがえのない存在。失ったそれを取り戻したいと強く望んでも何も不思議はない。

「それは」

と昼はくすくすと笑った。

「もう持っているよ。失ったなんて思っていない」

明るくて負けず嫌いな、でも悩みながら歩いている勇敢なゆら。この世で一番大切な苔とゆらの二人の軽蔑を受けることになるうとも諦めきれない望み。

この妖怪達を利用してまで手に入れようとしている自分はなんと醜悪なのだろうと昼は笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7820y/>

椿の契約

2011年12月1日13時48分発行